

桜魏転生録 弐(修正中)

響歌

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは同一存在の内の一人が戦場を翔る歌姫達と歩む物語
桜魏転生録との繋がりもあります

目次

プロローグ	
2つ目の始まりの	1
激怒 上巻	6
激怒 中巻	12
激怒 下巻	21
始まりのルナアタック	
動き出す運命と降臨する魔術戦士その	32
1	
動き出す運命と降臨する魔術戦士その	37
2	
邂逅・接触・衝撃の真実の連発その1	43
43	
再開の夜	98
98	
邂逅・接触・衝撃の真実の連発その2	49
49	
邂逅・接触・衝撃の真実の連発その3	55
55	
邂逅・接触・衝撃の真実の連発その4	63
63	
邂逅・接触・衝撃の真実の連発その5	71
71	
王と聖女と決闘と防人とその1	81
81	
王と聖女と決闘と防人とその2	87
87	

もう1つの出会いと出会いの予兆

104

目覚めと現状

114

プロローグ

2つ目の始まりの

少年は目を覚ました

そこは真つ白で光輝く空間

そこは何もないが悪い気分はしない空間

??? 「ここは？」

少年は、呟いた見たこともない場所知らない光未知なる場所に警戒心と好奇心が沸き起こる

??? 「俺はあのとき確か……!!!」

少年は思い出した。大切な人達を守るために狂気に堕ちたこと、そしてその狂気に堕ちた後に敵を倒し仲間をも殺し、罪どころか関係さえもない人々を斬り殺し最後は仲間の手で殺してもらったことを

??? 「俺は死んだのか……？」

少年は誰もいないその場所で、一人呟いた勿論その言葉に答えを返す者はいないはずだった

「君は確かに死んだよ」

「そうかならここは、現世で言う監獄みたいなところか？そりやそうだなあんなに仲間や罪の無い人々を殺したんだ。これじゃ足りないくらいだよな・・・」

「それは違うよ桜魏未翔君♪」

未翔「それはどうことだ？」

「あれ？自分の名前を当てられたのに驚かないんだね？」

未翔「まあ俺が死んでいるなら話しかけてくる奴は、さしずめ神様辺りだ俺の名前が知られていて当然だ。それよりさっきの言葉はどう言うことだ？」

神様「君結構鋭いねまあ良いやさっきの言葉の意味の説明をしよう。まあ長くなるから覚悟してくれよ♪」

※この説明は桜魏転生録でされているので飛ばしますと言うことで

「キング・クリムゾン!!!」

神様「と言う事なんだ」

未翔「大体分かった」

神様「イヤー一回で理解してくれて助かるよ。と言うことで転生してもらおうけど、世界は戦姫絶唱シンフォギアと言うアニメが元となった世界。それと、赤ちゃんからスタートだよ。」

未翔「なんとかなるのか？」

神様「まあそのまま転生何てしても、彼方の世界怪物ノイズの餌食になるのは目に見えるから、特典として願いを聞いてあげよう!!!」

未翔「それはありがたいな。ならまずは俺の生きていたときに使ってたカードゲームのカード全てを転生後の世界の俺の家に送ってもらえるか？」

神様「うんお安いご用だけどなぜそんな願いを？」

未翔「それは、これを願うからだ2つ目はカードのモンスターや能力をも実体化させる能力」

神様「なるほどねー良いよ他には？」

未翔「GOD EATERってゲームの武器、神機を俺専用のやつをできればゲームで使ってた武器パーツとバレットも全て送ってほしいんだが・・・」

神様「OK!、パーツ交換用の機械と一緒に贈るね。それと、持ち運びが面倒だろうから君専用の空間をプレゼント!!そこにカードも含めて全て入れておくから♪ちなみはその空間は君が念じればそこへの扉がどこでも出てくるよ!!」

未翔「良いんですか？ありがとうございます!!!しかもスゲー便利!!それじゃあ3つ目は俺専用の仮面ライダーを作りたいんですが」

神様「良いよー他には？」

未翔「後はないですかね？」

神様「なら、面白そうだから神様オリジナルのスタンド一体プレゼント!!! さあこの箱からカプセルを1つ取り出してくれ!!! そのカプセル内のスタンドが君のパートナーになるスタンドだ!!!」

そう言われ未翔は、箱の中に手を入れて1つカプセルを取り出しそれをあけたそうすると、そのカプセルの中から空のように青い巨大な鳥のようなスタンドが現れた

神様「おー!! 凄いの当てたねーそいつの名は、(ビジョン・フェニックス) 能力は見せたい対象全員に幻覚を見せることができるんだ!! ちなみにその幻覚に殺されても傷1つつかないけど、殺された感覚とかはあるって言う強力な力だ!! 自分がビジョン・フェニックスの上に乗って移動することをできるし、このスタンド自体まあまあ強いよ!! それにフェニックスって名前だけあって、自分や味方を回復できると言うよりこの子の能力の派生として幻覚や回復が使えるんだ。本当の能力は自分で調べて見てね。そっちの方が良いだろうし♪」

未翔「分かりました。ありがとうございます!!」

神様「良いってことよ!! それじゃあ2度目の人生存分に楽しんできなよー!!」

そう言うとう未翔は光の球体となって飛ばされた

神様「……………頑張れよ。未翔今はお前やお前の同一存在達しか、今多くの異世界

で起こっている危機を救えねーんだからよ」

先程とはうってかわり、一人になった神様は神妙な顔つきでそう呟いた。

未翔 side

どうやら転生はできた

本当に赤ん坊だなど言うことは

ここから3年ぐらいが一番の山場だな 頑張れ俺!!

未翔 side out

つづく

激怒 上巻

未翔はこの世に転生して約13年ほどたった今の未翔の年齢は13歳中学二年である

そして、今未翔は内心腸が煮えくり返っていた……

事をたどれば数カ月前ツヴァイウィングの公演中に、認定特異災害に認定されており人に触れるだけで人を炭素分解してしまう化け物ノイズが現れ会場にいた観客・関係者合計10万人を越えのその会場は、突如現れたノイズにより惨劇の地と化した。観客達は、正に天国から地獄に落とされたのだ。そして、その事件で12874人も多くの命が失われたが、これでも少ない方だと未翔は思っていた。

しかし、これだけでは終わらなかった。週刊誌などでその惨劇でノイズに襲われて無くなったのは12874人の内の3分の1で、他の死者は避難経路を争った時の暴行や将棋倒しによる圧死が多く、要するに人の手による被害だったのだ。これにより少なくとも日本のあらゆるところで生存者への理不尽なバッシングが始まった。更には、ノイズの被害者やその遺族に補償金が国から支払われると

分かると、更にエスカレート自己責任だと反対する人々も現れだした。

更には関係どころか興味すら無かった人々までもが憂さ晴らしとして狂熱的に扱いだした。

そして、そのノイズの被害者は未翔の通う中学にもいた。彼女は、あの惨劇で大怪我をし入院リハビリを乗り越えて学校まで通えるようになっていた。

しかし、彼女を迎えたのは祝福ではなくバツシングの嵐だった。最初こそ影で言われる程度で被害はなかったが、ある時ある女子生徒からのヒステリックな叫びがトリガーとなり、全校生徒から攻撃されると言うか理不尽極まりない行動が起こったのだ

それが始まりもう10日たった未翔は爆発寸前である

未翔（なあビジョンそろそろぶちきれても良いか？）

ビジョン（落ち着け!! 気持ちは分かるが・・・）

余談ではあるが未翔のスタンドビジョン・フェニックスは4年ほど前から自我を目覚めさせている

未翔（だが、あの単細胞どもどこかで止めないと最悪罪の無い立花が壊れるぞ!!）

ビジョン（確かにそうだがここで止めてもアイツらはまだ続けるぞ）

未翔（・・・）

未翔がビジョン・フェニックス（以後ビジョン）と話していると

男子A「お前みたいな悪人は一生逆らえないように奴隷にしてやる!!」

男子B 「いいなそれ!!」

男子C 「やれやれ!!」

女子A 「あんな罪人女にはびつたりね!!」

女子B 「ざまあないわ!!」

その他大勢 『人殺し!!人殺し!!人殺し!!』

しかしこの言葉の数々がとうとう未翔怒り触れる原因になった

「ドガー……ン!!!」

明らかに大きな何かを蹴りあげる音が聞こえ。その場にいた全員が、音の発生源に目をやった。すると椅子に深々と座る未翔の姿そして、逆さまになって落ちている未翔の蹴りあげたと思われる机

全員が息を飲んだ。何故なら今まで未翔がキレた姿を誰人一人として見たことが無かったからだ。それこそ小学生の時から

男子A 「なっなんだよ!？」

男子の一人が未翔に突っ掛かる

未翔「なにがなんだよだ?あ?さつきから聞いてりや立花をよってたかって罪人だの人殺しだの奴隷にしてやるだのざけてんじゃねーぞ!!このオツムの小さいガキどもが!!!」

そう言つて未翔は、異常な殺気を放つそれこそ殺気だけで人を殺せそうなほどにその場にいた全員が驚いた。何せ学校1大人しく物静かだと有名だった未翔が、異常な殺気を放ちながらあんな暴言を発したのだ。

女子A「そつそれがあんたになんの関係があるのよ!?まさかヒーローのつもり?」
女子の一人が勇気なのか単なる馬鹿なのかは知らないが未翔に問いかける

未翔「へー・・・こんなに殺気放つてるのに質問しようと思う生ゴミがいるんだ驚いたよ・・・」

未翔「それでなんだったか?あーそうだ(ヒーローのつもりか?)」だったな返答としては俺がヒーローな

訳ねーよ」

男子D「だったらさっさとときやがれ!!!俺達は絶対正義のもとそいつーガハッ!!!」

男子の言葉を言い切ることができなかった何故なら未翔がその男子生徒の腹を殴り飛ばし壁に叩きつけたからだ

一瞬の出来事だった誰も未翔の動きに着いてこれなかった・・・

未翔「何が絶対正義だ!?オイ!!さっさと言ってみろや!!!このガキが!!さっさと答えろや!!」

未翔は殴り飛ばした男子生徒の首を掴みます持ち上げながら聞いた

未翔「この場にいるゴミども耳の穴かつぽじってよーく聞きやがれ!!」

未翔は持ち上げていた男子生徒を落として話し出す

未翔「この世に絶対正義なんて存在しねーんだよ!!何故か分かるか?それはな……人はいいや生き物は立場や考え方によって正しい物が違うからだ!」

未翔は少し柔らかく優しい声で話した

女子B「なっなによ!!?格好なんてつけて!!」

その他大勢『そうだ!!そうだ!!そうだ!!』

未翔「はあ……お前らウゼエな……ならいつペン死んでみる」(ビジョン……)
未翔がそう言い終わるとその場の響以外の全員を窓から投げ落とした(ここは三階ま
ず痛いじゃすまないだろう)

女子A「えっ?『ぐじゃっ』……」

男子生徒A「!?!ドゴツ!!」

その場にいた響以外の全員は窓から

投げ落とされて死んだ………幻覚を見せられていた

未翔「まあこんなもんか?ねえ立花」

響「はっはっは!!!」

響は、さっきの未翔のキレイな姿を見たことで怯えている
未翔「1度俺の家に行くぞ？」

未翔が教室を出ながら言う

響「はっはい!!!!」

響はその後を恐る恐る着いていった・・・

つづく

激怒 中巻

響 side

今私立花響は、最大のピンチを迎えてるのかも知れない。

教室で私に暴力を振るおうとした生徒全員が、未翔君の激怒の後にいきなり倒れたのだ。恐怖している子や気絶している子、何か眩いてる子その反応は様々だけど、どれも明らかに何かに怯えているのは明らかだった。未翔君が何かをしたのだろうけど、何をしたのかは分からない。現状を必死で整理していた私に未翔君は、自分の家と一緒に来るように言ってきた。最初は断ろうかと思っただけど、みんなのあんな反応見たら怖くて口に出せずつ私は恐る恐る未翔に付いて行った。

響 side out

未翔と響は、学校を出て未翔の家に向かっている

未翔（立花・・・やっぱり怯えてるな）

ビジョン（無理ありません。あんな状況見せられた後に家に一緒に来いだなんて、脅迫とたいして変わりませんよ）

未翔（……………）

未翔「なあ、響」

響「はっはいい!!」

未翔「やっぱり怖いかな？俺のこと……………」

響「いついやそつそんなことは……………」

未翔「無理しなくていいよ……………本当のことを言ってくれ

響「実は……………凄く怖い……………」

未翔「そつか……………」

それ以降二人は話をすることなく未翔の家に着いた。

響「未翔君これ本当に家ですか？」

目の前には、家と言うには大きすぎいつそ城と行った方がしっくりくる建物があつた。

未翔「残念ながらそうだよ」

そう言いながら未翔は家に入った

響「まつ待つてよー!!!」

響も未翔を追つて家と言うには大きな豪邸の中に入って行つた。

内部を見た瞬間響はさらなる驚きと感動に襲われた。

風が吹けば今にも動きそうな植物の絵画

白を中心に様々な色で彩られている壁

そこにはこの世とは全く違う世界と錯覚するような空間が広がっていた。

響「凄い・・・キレイ・・・」

響はそう呟いた

未翔「喜んでもらえて良かったよ」

未翔もさつきとは全く違う穏やかな顔で答えた

未翔「俺の部屋に移動する」

そう言うのと平然と階段を上っていく

響（初めて来た未翔君のお家で、いきなり未翔君の部屋!?!）

まさかの未翔の一言に戸惑いながらも、響は未翔に着いて行った

響（未翔君の部屋も大きい!!!）

未翔の部屋は高級ホテルの一室と言われても納得してしまうほどに広がった。

未翔「適当に座つといて良いよ」

響は近くにあつた椅子に座る

未翔「上の服脱いでくれるか？」

未翔は何かを探しながら不意にそう言った。

響「!? あっあの・・・未翔君!? そっそう言うのは、もっと・・・こう・・・親しくなつてからで・・・」

響は顔を赤らめながら言う

未翔は響のその反応で自分が言ったことに気づきいた

未翔「ちつ違う!! あれだよあれ!! 立花お前腕怪我してるから、手当てるのに服の上からじゃできないからだよ!!」

未翔も顔を赤くしながら言ったことこの

響「なっなんだびっぴツクリしたー」

未翔「うん・・・すまん」

未翔は救急箱を片手に答える

未翔「じゃあささつと手当てるわ」

未翔はあつという間に手当てを終える

響「未翔君凄くなれてるね!!」

未翔「まあな、よく怪我するし・・・」

未翔「つ!! ゲホッ!! ゲホッ!!」

響「みっ未翔君!? 大丈夫!?!」

未翔「ああ、大丈夫だ昨日から風邪気味でね少し薬飲むから」

未翔はそう言うと言葉を1錠出して飲んだ

未翔「すまんこれ飲むと眠っちゃうから横になるわ立花帰ってて……ZZZZ

Z
L

未翔は、話し終わるか終わらないかで、眠ってしまった。

響「寝ちやった……帰ってて良いらしいけど……」

響は未翔を見ながら呟いた

響「聞きたいこともあるし起きるまで待つておこう!!」

響「それにしても……未翔君の寝顔……可愛い……ついさつき怒つてたのが嘘みたい……」

響は未翔の顔を覗き込みながら言った

響「あれ？未翔君の寝顔を見てたら……何だか……私まで……ZZZZZ

「

響は未翔の横で寝てしまう……」

それから1時間程がたった

響「あれ？私……そうだ!!未翔君の寝顔を見てたら眠くなつて寝ちやったんだそれにしてもこの尻尾フワフワしてて気持ちいいな……しっぽ……えええええ!!」

丈夫だから！」

響の行動と言葉に未翔は驚いたがどこか安心して落ち着きを取り戻した

未翔「ゴメンさつきは尻尾見られたからつい取り乱しちゃった……」

響「うんうん大丈夫だよ。それに未翔君その尻尾のこととか教えてもらえる？」

未翔「まあな見られたなら話すしかないし立花なら安心して話せると思うから」

響「ありがとうそれと私ことは響って呼んでよ!!」

未翔「なら俺のことも未翔で良いよ響」

響「分かったよ未翔♪」

未翔「ならこの尻尾のことについて話すわまずこの話をする前に響は妖怪は知ってるよね？」

響「うん河童とか天狗とかのこと? ……未翔まさか妖怪だったりするの!？」

未翔「まあ半分正解だな」

響「半分?」

未翔「うん半分理由は俺は半妖つまり人間と妖怪のハーフなんだちなみに狐の妖怪九尾を母親に持っているからこの尻尾が現れたんだ」

響「て言うことは未翔がさつき学校で同時に皆に何かしたのも未翔の妖怪の力?」

未翔「いいやこの力とはまた違う力だよ」

響「そうなんだ話してくれてありがとう」

未翔「こちらこそ俺を受け入れてくれてありがとう」

響「そう言えば!!もう1つ聞きたいことがあったんだ!!」

未翔「もう1つ聞きたいこと?」

響「うん未翔はなんで私を助けてくれたのかなって思ってた」

未翔「え?それは・・・てかどうしてそれを聞こうと?」

響「だっていつもほとんど人と話さないし、私を避けてるようだったし」

未翔「それは・・・」

未翔は響を押し倒す

響「え?え?未翔?これは?」

未翔「なんでか教えるよ・・・それはね響俺が、響のこと好きだからだよ!!!
／／／

／
そうやって未翔は響を抱きしめる

響「未翔が私のことを好き?友達としてじゃなくてだよね?」

未翔「うん、ダメ?」

響「別にそれはないけど私のどこが良かったの?なんと言うか私何も取り柄無い

よ・・・」

未翔「響の笑顔が可愛かった・・・／＼」

響「!?ありがとう♪私も未翔のこと好きだよ♪」

響も未翔を抱きしめる

響「それとこれも未翔にあげるね」

響はそう言うのと未翔の唇に自分の唇を重ね合わせた

未翔「?!?／＼／＼」

響「ファーストキスあげちゃった／＼／＼」

響は顔を赤らめながらそう答えた

つづく

激怒 下巻

未翔は、響に自分の正体を知られた後の告白とファーストキスここで終わったが、何事も無かったかのようにとは無理だった

だがこれだけは言える未翔も響も最高の笑顔で話していた

響「あつ!!もうこんな時間だ!!!私帰らなきゃ!」

未翔「送って行くよ」

響「ありがとう♪それじゃあ行こ!!!」

未翔「そうだな♪」

こうして二人は家を出た

響「それにしても意外だったな未翔があんなに喋るなんて♪」

未翔「まあ驚いて当然だね。普通は俺の性格上暗躍するタイプだから、目立たない方が何かと便利だしね♪」

響「そう言えば暗躍って言ってたけど、実際どんなことしてるの?」

未翔「うーん学校内だと、先生や生徒のあらゆる情報をその時に合わせて密かに流して噂になってるの楽しんだり、二重スパイ的なことをやったりしてるね」

響「……、もしかしてこの前のテストの範囲が明確に同学年で広まったのって……」
未翔「さあ？ どうだろうね〜♪」

未翔は笑顔で答えた

響（うわー凄く悪い笑顔してる……これ黒だ）

そんな話をしていると、響の家に着したしかし未翔は

響の家を見て怒りがこみ上げてきたなぜなら……

塀にはありとあらゆる暴言が書いてあり窓は何かを投げられたのだろう割れてい
る……

それを見ている響も悲しそうだった

響「……………!？」

未翔は響の頭に手を乗せて軽く撫でながら

未翔「大丈夫だよ……これもすぐ収まる……」

響「未翔……ありがと♪少し元気が出たからもう大丈夫!!!それじゃあね!!!」

未翔「ああ、じゃあな!!!」

響は家に入って行った後、未翔は笑顔を崩しその顔はまさに鬼や悪魔と言う言葉が相
応しいほどの怒りに染まっていた。

未翔（ビジョン……一度家帰って装備整える）

こう言つて未翔は家に帰つて行つた

響 side

あの日から一週間経過した。あの日から未翔は学校を休んでいる

響「ハー未翔いつたいどこいるんだろうなく・・・」

放課後私は教室でつぶやいた。

???「また、溜め息ついてる。響が未翔君と帰つたて聞いたときは、凄く驚いたけど本当に何があつたの？」

私に話しかけたのはいつの間にか教室に帰つてきてた未来。私の大切な友達だからまあ少しだけならいいかな？

響「フッフッフ実は・・・未翔に告白されたんだくクラスのみんなには内緒だよ？」

未来「えー！！未翔君が告白!?それで響はなんて答えたの!？」

響「実は・・・未翔が私と二人でいたあの時見せた顔が可愛すぎて即OKしちゃつた／／／／」

未来「それで今は、未翔君に会えなから溜め息がいつも以上に多いのね？」

響「えへへへ♪」

未来「一応分かつただけで響はまだ隠してることあるでしょ？」

響「やつぱり未来には隠し事はできないなりでもこれは私が話して良い話じゃないから……未翔君に関わる話だからこれだけは私一人の判断じゃ話せないの。ゴメンね未来」

未来「響がそんなに言うなら、本当に大切な話しだつて分かるから大丈夫。その代わり未翔君のこと紹介してよ私未翔君と話したことないし。」

響「分かった約束だね♪」

私はそう言いながら未来と指切りをした

響・未来「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ます指切った!!」

私は、その後未来と別れて家に帰つて来てポストを見た。すると一通私宛に手紙が来ていた

響「送り主は……未翔!?!」

私は急いで家に入り自分の部屋に行くと手紙を開けて内容を読んだ

手紙「オツス響まず一週間も顔出せなくてゴメンな。」

今俺は、ある諸事情で他のところで、何百人もの人の命を背負った作業をしてるんだ。あつ!!爆弾とかそう言うのじゃなくて、人の生活を整える感じだから命の危険は無いから安心して!!

それと明日か明後日ぐらいには学校にまた顔出せると思うから!!

それと響に御守りを渡しとくわ

幾つか入れたから友達とかにも渡しといて良いかもね

それじゃあまた今度」

私は封筒の中を覗くと5つのお守りが入っていた

響「未翔は明後日には帰ってくるのか・・・」

響「そうだ!!その時は未翔に私の友達を紹介しよう!!」

私は上機嫌で今日と言う日が幕を閉じた

響side out

未翔side e

昨日の夕方響の家のポストに手紙を入れたが響は見てくれただろうか?

俺がそんなことを思っていると

ビジョン(そろそろ第2波が来ますよ)

未翔(分かった)

ビジョンの一言で戦闘体制に入った?

え?何処にいるのかって?そりゃもちろん国の最高機密の施設だよ。それこそ日本

中のテレビ・電話それぞれどころか日本にある電子機器を全てジャック出来るような施設。

何しに来たかは簡単。今の理不尽は日本の現状を変えるため罪の無い人が罪人のように扱われる現状から普通の生活に戻ることが出来るようにするためである。

自衛隊A「動くな!!お前はここに何しに来た!?!」

未翔「何しに来たね……そんなの簡単だよ?今の日本の現状を変えるためだよ。」
自衛隊B「現状を?」

未翔「ああ、あの悲劇から生き残った人やその家族への理不尽な差別を無くすためだよ!!」

俺の今の姿は、魔法使いがかぶるようなトンガリ帽子金属バージョンに手には機械的な見た目の杖。体は、ロープで覆い隠し、顔は何処と無くカマキリを彷彿とさせる姿をしている。

自衛隊C「そうか……だが通すわけには行かない!!」

未翔「いや、お前たちは既に俺を通してはいるし、負けている……」

俺がそう言うのと自衛隊と思われる男3人はその場に倒れ気絶した

未翔「さっさとコントロールルームに行つて始めねえとな!」

俺は変身を解きながら眩いたそして歩き出そうとしたしかし足が動かない。いいや体の殆どが動かない。かろうじて動く首を後ろに向けると、俺の影にナイフが刺さっていた

未翔（影縫い!?クソツツ!!ダリーナ・・・）

俺がそう思っていると

???'「君は何を始める気なんだ?」

一人の大柄な男が現れる

未翔「風鳴弦十郎・・・」

弦十郎「こっちの情報は既に手にしてるのか・・・」

未翔「まあね。こっちも裏で暗躍するタイプだから・・・」

未翔「それじゃあ本題に入る前にもう一人出てきたらどうだ?この影縫いをした本人

さんよ・・・」

???'「バレてましたか・・・」

未翔「当たり前だ・・・俺の持つてる情報的にはこれ使えるのはアメノハバキリのシン

フオギア奏者風鳴翼と、そのマネージャーのあんたしか知らないからな。緒川慎次」

弦十郎「君は何者だ?そして何処まで知っている?」

未翔「正体は、まだ教えられないが何処まで知っているかは教えていいぜ。そうだな・・・少なくともあのライブの時あんたらが完全聖異物にいろいろしてたのは、少なくとも知ってるし。他には、他の国の裏側も全て頭に入っているそれこそあんたらが知らない情報までビッシリな。」

緒川「!?本当に貴方は何者ですか!？」

未翔「ヒントだけやろうそうだなヒントは桜」

弦十郎「桜……」

未翔「それじゃあ、俺はまだ作業があるので」

俺は影縫いを力ずくで剥がしてコントロールドームに向かった

弦十郎「なっ!?影縫いを無理矢理外したと!？」

弦十郎は驚いているまあそうだろうなあれを無理矢理とか普通じゃねーし

未翔「あちゃー追い付いてきたのかよ……」

緒川「こつちも仕事ですから」

未翔「そう言えばなんで俺が、ここに来ること分かったの?自衛隊は、ともかく翼さんのマネージャーの貴方と弦十郎が、出て来るってことは、ここに来ること分かったんでしょ?」

緒川「いいえ今回は偶然ですよあの会場で翼さんを守った貴方の事を調べる為にここに来たんですから」

未翔「ある意味奇跡だな」

緒川「そうですね」

未翔「それじゃあ!!」

そう言って俺は緒川に影縫いをした

緒川「なっ!! まさかあの時だけで技を覚えたんですか!？」

未翔「まあな、それじゃあ行かせてもらおうがその前に翼さんに言っておいて欲しいことがあるんです聞いてくれますか？」

緒川「内容次第ですね」

未翔「そうかならこう言っておいてください「彼女を救えなくてすまなかったと」それと「希望は捨てるな」とね」

緒川「最後の一言はどういう意味なんですか??」

未翔「俺と再開した時に答え合わせしてやるよ♪」

俺はそう言くと、その場を離れた

数分ほど走るとコントロールルームが前方に見えてきた

未翔「彼らが入って来れないようにしとくか・・・D—HEROディフェンドガイ裏側召喚!!ここを頼むぞ!!」

そう言って俺は変身を解除した後コントロールルームに入り、日本中のテレビ・ラジオ・等を占拠した

そしてノイズの幻覚を日本人全てに見せた・・・響やその友達には、あのお守りがあるから大丈夫だろう。

これで俺のしたいことは出来たし、後は帰えるだけだ。

俺はコントロールルームから出て再び変身した。

未翔「デیفエンドガイ戻れ」

デیفエンドガイがカードに戻りさつきまでデیفエンドガイを倒そうと奮闘していたであろう二人の姿があつた

未翔「俺のやりたいことは出来た」

弦十郎「日本中にノイズの幻覚を見せることか？」

未翔「情報が早いな。その通りだよこれで差別や迫害の威力は徐々に弱まるだろう……」

弦十郎「その為だけに日本を敵に回しかねないことを？」

未翔「ああ、それに俺は敵にできねーよ。」

未翔「それじゃあ、またいつか会いましょう。ビジョン!!!」

そう言つて俺はビジョン・フエニックスの能力で幻覚を見せて逃げた施設の外に出たらフエニックスの背中に乗り空を飛び家に帰り着いた

未翔「ただ今戻りました」

???「今回はいつも以上に盛大なことをやりましたね？」

未翔「すいません……」

??? 「大丈夫です手は打っておきましたよ」

未翔 「ありがとうございます」

さつきから話しているのは俺の母様桜魏雪（さくらぎゆき）大妖怪九尾であり、その見た目の若さは20代と言われても納得するほどで本当に凄い。そして俺の大切な家族である。

雪 「今日は、疲れたでしょうからもう寝なさい」

未翔 「はい母様それではおやすみなさい」

そう言つて俺は部屋に入り眠つた

ちなみに今回の出来事は、当然歴史に名を残すこととなった。

未翔 side out

つづく

始まりのルナアタック

動き出す運命と降臨する魔術戦士その1

未翔 side

自分が起こしたあの事件から2年程の年月が過ぎ今は、行きつけのお好み焼き屋の「ふらわー」を彼女の響と友人の未来の3人で出たところだ。

響「いやーやっぱりふらわーのお好み焼きは絶品だよねー♪」

未翔「だからって響……あの量は異常だ」

響「あれくらい普通だよね未来？」

未来「特大お好み焼き4皿で普通なんて、普通じゃありません!!」

響「えー!!! 未来まで敵に私って呪われてるかも……」

未翔「そりゃーねえな、だってこの俺が一緒にいるんだからな」

未来「未翔もその根拠は何処から出てるの？」

未翔「簡単だ今までの経験からだ!!」

響「おーー言い切った!!」

未来「響そこ感心するところじゃないよ!？」

未翔「イヤー二人といるとやっぱ楽しいなー!!」

響「それじゃあ私と二人でいるときはまるでいまいちみたいに聞こえるんだけど?」

俺の一言に響が頬を膨らませて言ってきた

未翔「勿論響と2人でいるときもスゲー楽しいぜ? だけど3人だとまた違う楽しさがあるってことだ!」

俺は響の頭を撫でながら言った

響「そうだね♪ だけど未翔・・・あんまり無理しない方が良いよ? 背丈は中学生の時から変化してないんだし」

響の一言が、俺に突き刺さる・・・そうなのである実は、俺桜魏未翔は中学の時から身長が、140cmから進歩してないのである病気ではないのだが何故か背が伸びないのであるそして気がつけば響や未来に、身長を抜かされ今では、その身長の差から姉弟に間違われるなんてことはしよっちゅうで結構ツライ。

未翔「むっ無理なんか無理なんか・・・」

俺は今にも泣きそうな目で響に訴える

響「ごめんごめん（イヤーやっぱ未翔の泣きそうな顔は可愛いなく? このまま持ち帰ってグフフフ）」

未来「はー・・・響よこしまな感情が顔に出てるよ・・・」

響「えく？なんのことかな？（おっとつい気を付けなと♪）」

未来「ほら!!そろそろ未翔も立ち直って折角3人で集まったんだから!!」

未翔「それもそうだな・・・なんとか立ち直れそう」

響「えく!!もう少し未翔の泣きそうな顔見ときたかつたなく♪」

未翔「ほう？本音が出たな？よろしい後からこれでもかかってぐらい可愛がつてやるから!!」

響「イヤー♪未翔に襲われる♪」

未来「ハイハイそのバカツプルはイチヤイチャするのを止める」

未翔「別にその気は無かつたんだがな・・・響はともかく」

響「それじゃあ次は、何処行く？」

未翔「無視かよまあ良いやそうだな・・・そうだ!!あそこはどうだ？久し振りのシャルモン!!!」

響「それいいね♪未来は？」

未来「私も賛成かな？最近忙しくて行けなかつたし」

響「それじゃあ決定!!!行く♪」

響は俺と未来の手を引いて走った

未翔 side out

???
side

この世界に迷い混んで、気づけば1年半程の時間が経過していたこの世界に来た当初は、どうしようかと明け暮れていたけど、そんな時に出会ったあの人は俺の戸籍を作ってくれただけじゃなく店まで用意してくれて本当に頭が上がらないよ。

今ではこつちで師匠のお店と同じ名前で店を出してなんとか生活できている問題と
言えばノイズぐらいいだ

??? 「もしノイズが来たらその時は、コイツの力を使わなきゃなノイズと戦えるかは分
からないけどそれでもここは、俺にとつての大事な場所だから出来ることはやらないと
な!!!」

俺はドングリの描かれた錠前を見ながら今日は珍しく人の居ない店で一人呟いた

響 「店長!! お久しぶりでーす!!」

??? 「おつ!! 響ちゃん久しぶりだね? 今年からリディアンだっけ? 俺も調理実習のコ
チとしてたまに顔出すことになるからよろしくね?」

響 「おーそれはまた凄い人がコーチに・・・」

未来 「プロ教えて貰えるなんて凄いです!!」

??? 「買い被りすぎだよ未来ちゃん俺は師匠に比べればまだまだだし」

未翔「そんなことないですよ？城ノ内さんのケーキ本当に美味しいですし」

城ノ内「嬉しいこと言ってくれるねー！そう言えば注文は？」

響「私はいつものお任せで!!」

未来「私も響と同じお任せでお願いします」

未翔「俺は城ノ内スペシャルで」

城ノ内「かしこまりました!!それではごゆるりとお待ちくださいませ」

俺はそう言ってお辞儀を終えると厨房へ向かった

厨房へ向かいながら俺は

城ノ内（いざというときは、あの3人も守らなきゃいけないのか・・・俺にできるのか?・・・いや、やるんだ!!じゃないと師匠に怒られちゃう!!）

城ノ内「初瀬ちゃん見ててくれよ!!」

俺はそう言っただけで気合を入れ厨房へ入った

城ノ内 side out

つづく

動き出す運命と降臨する魔術戦士その2

響side

立花響は、シャルモンを出た後に一人で、風鳴翼のCD を買いに行った。しかしノイズが、突如現れ逃げる羽目となった。しかも途中で、親とはぐれた女の子と出会いその子と共に逃げていた。

しかし、響と女の子はノイズに挟み撃ちに合う

女の子「お姉ちゃん!!」

響「大丈夫お姉ちゃんがついてるから!!」

響は、そう言つて女の子を抱えて目の前の川に飛び込み向こう岸に逃げる

響side out

未翔side

未翔「おいおいおい!!マジかよ!!!」

未翔だ!!

いや今は、そんなこと言ってる場合じゃない!!

何故なら今俺は、ノイズが現れたので変身して迎撃しているが、その途中2番目にあつて欲しくないともしえる現実を目にしたからだ。それは……響がもう一人女の子と一緒にノイズに終われている光景だ!!

未翔「速く行かねーと!! いけねーんだよ!! だから……!!」

未翔「邪魔だ!!! このショッキングカラーの固まりどもがー!!!」

俺はそう言いながら、手に持っている杖で、邪魔する相手を叩き潰して移動する!!!!!!

未翔（待つてろよ!! 響!! 今助けに行くからな!!）

響 side

響は、川を渡った後に、女の子と逃げとある工場地帯と思われる場所に、到着した。

その後、女の子を背負って1つの建物へ梯子で登って、建物の屋上まで到着し一心できると思われた。

だが!! 何処から湧いてきたのか、大量のノイズに囲まれてしまう。

響「生きるのを諦めないで!!!」

響は女の子を、抱き締めそう言ったその時!! 響の頭のなかに1つの歌が浮かび上がった。

響「Balwisyall Nescell gungnir tron」

響は、その歌を口にした。すると、響の服装がリディアンの学生服から、黄色と白の戦闘服のような物に変化した!!

響「これは!?!」

響は、自分の服装の変化に、驚愕した。しかし、その時一匹のノイズが響に向かって来た。だが反射的に、響が出しだ片手に、ノイズが触れた瞬間ノイズだけが、灰となった。

響「これなら・・・!!」

響は、女の子を再び抱き締めて、建物から飛び降りる。

建物から降りても、ノイズは、そこにいたしかも、数も多ければ、巨大なノイズまでいる始末。

響「このままじゃ・・・」

響（助けて・・・未翔!!）

響は心の中で叫んだらその時!!

響達の回りにいたノイズ達が、上空から放たれた無数の、水の矢によって殲滅された!!

響「え?」

響は驚愕した。それはそうだろう目の前の絶体絶命の状況が、一瞬にしてひっくり返ったのだから。

そして響の前に上空から何者かが降ってきた。

その見た目は、体格は小柄で、頭から足の爪先まで鋼鉄の鎧で、覆われており頭には、魔法使いがかぶるような大きめの、三角帽子をかぶっていた。マントを羽織っており、右手には杖を持っていた。

未翔「響、大丈夫か？」

鎧の男は響に問いかけた。

響「その声、未翔なの!? どうしたのその鎧!!」

未翔「響、話は後だ!! まずは、その子を守ることを専念しろ!!」

響「分かった!! だけど、後で絶対説明してもらおうからね!!」

未翔「分かっているよ。それと響、俺が前に教えた護身術覚えてるよな? あれは、そのまま戦闘に使えるから、今が使い時だぜ!!」

響「分かった!!」

響 side out

未翔 side

未翔「さあ、シヨッキングカラーの固まりども……貴様らよくも、俺の響に手を出そうとしてくれたなあ？ 勿論死ぬ覚悟は出来てるよな？ まあ、できてなくても殺すけどな!!」

俺はそう言うのと右手に持った杖サイケインを構えた

未翔「I型炎発動……」

俺はそう言うのと、杖の先端から炎を、撃ち出して次々にノイズを殲滅する。

未翔（それにしても……響がシンフォギア奏者ねえ……神様が気を利かせてか#この世界についての前世での記憶が#ボヤけてるからついさつき何となく思い出せる程度だった）

未翔「まあ、俺の生活そのものには支障はないし、良いかな？」

未翔（だが……少しだけさっきの次の展開を思い出した……）

未翔（ビジョン、一時撤退用に幻覚を見せる用意頼むわ）

ビジョン（彼らとの接触到、何かサプライズ的なのを、用意する気ですか？）

未翔（まあな♪）

未翔「そんなのと言ってる間に来たねー『アメノハバキリ』適合者にして片翼の歌い手が……」

俺はそう呟いたするとバイクの音が夜の闇に響き渡り一人物が蒼と白のバイクに乗り現れた

??? 「Imyuteus amenohabakiri tron」

そして歌を口ずさみ鎧を纏う

未翔「ここから運命は、回り始める・・・」

俺は一言そう呟いた勿論誰にも聞こえないように

つづく

邂逅・接触・衝撃の真実の連発その1

バイクを仮面ライダーさながらに乗りこなし現れたどころか、ノイズまで引き飛ばして、派手な登場をかました一人の少女は、響の前でバイクを止めた。

バイクで現たのはなんとあの風鳴翼だった。

そして翼を見て、響は、驚きと同時に確信に変わった。あの2年前の、ライブでの出来事について。

ちなみに未翔は、シンフォギアも纏わずバイクで、ノイズの集団に突っ込み、無事ですんだことに、驚いていた。

翼「貴女は、下がってその子を守ってなさい危ないわよ！」

翼「Imyuteus amenohabakiriron」

翼は巨大なノイズに向かいながら聖歌を奏でその身にギアを纏い目の前の戦場へ足を踏み込むのであった。

勿論未翔の眩いた一言など全く聞こえることもなく。

???
side

未翔達が、ノイズと戦闘をしている頃、1人の人物が、街中をさ迷っていた。そこは、街中にしてはにはあり得ないとほど人がおらず、ゴーストタウンかと思うほど静かであった。しかし、どの場所も異つい先程まで人がいて慌てて逃げたあのような、彼にとつては不可解な風景が広がっていた。そして、そんな彼もも又この街にあまり見ない、姿をしていた。1目で外国人と分かる容姿をしており、その体は長身でガタイが良く正にジェントルマンと言うような見た目をしていた。そして頭には、シルクハットをかぶり街を、さ迷っていた。

??? 「ここは本当にどこなんだ!?あの時俺は、生涯を終えて死んじまった筈なのに気がつけば、見知らぬ街で倒れていて挙げ句の果てに、回りの建物は見たことのない物だらけ更には人1人いない始末だ。」

彼は近くにあったベンチに座りそんな事を一人しゃべっていた。

??? 「まあ先ずは、人に出会わなきや始まるもんも始まらねえ!!さっさと人を見つけてやるぜ!!」

彼が気を取り直しベンチから立ち上がる

??? 「そう言えば、ずっと人を探すことばかり考えてたが、今は1体何日なんだ?」

彼は人を探すことに気を取られ過ぎて自分のが寿命で死んでからどれ程の日数が経過しているのか考えていなかった。

??? 「もしかしたら!! 新聞の1冊でも見つければ今な何日なのか分かるかも知れねえ!! 運が良けりやこの街のことも分かるかもな!!」

彼は、現状について調べるために店と思われる建物に入り新聞に目を通した。すると、かれは目を見開いて驚いた。

??? 「この文字まつまさか!? 日本!? そして俺の死んだ日から数日どころか100年以上たつてるじゃねーか!!」

彼は、驚きを隠せなかった。それはそうだ今まで彼自身は、多くの非現実を目にしてきた、それらはどれも現実離れし過ぎた現象であった。

ある時は相手を一瞬にして凍らせる力を

ある時は生物を超越して神の領域に達し

そして現在の彼はそれと同等以上の状況にまたしても出くわしたのだ。

この街で目が覚めた時からから覚悟はしていた。しかし、それでも驚きを隠せなかった。自分が死んでから100年以上経過していたという予想以上の答えが、原因であった。

??? 「俺は、一体どうすれば・・・」

彼は悩んだ。悩みながら街を再びさ迷ったしかし、さ迷った先で目にした光景がその悩みは吹き飛ばし代わりに、心の底から湧き出る驚きと、懐かしさが彼に押し寄せた。

その後継とは、黄色と白の特殊な鎧を身に纏った少女が子供を守りながら、周りを囲むショッキングカラーの化け物と戦っている姿であった。

彼は、その戦っている少女が拳や足を繰り出すときに現れる電気のような光に見覚えがあった。忘れるはずもない。その血の運命に正面から戦いを挑んだ者達が、使っていた力と同じ物であるのだから。

??? 「あの嬢ちゃん・・・波紋を・・・まさか・・・」

怪物はある予感が頭をよぎった。

そしてそれは確信へと繋がる!!

少女の首の付け根に星形の痣があることによつて。

??? 「そうか!!もしかしたらこの未来にもう一度生を受けたのは、あの子の力に誰かが俺を導いたのかもかも知れねえな!!」

そう言うのと彼は迷いなく敵の中へと飛び込んで行った。

??? side out

響 side

響は、今苦戦を強いられていた。

ついさつき突如発言した、電気のような光の力を使い未翔に、教えてもらっていた護身術等で何とか女の子を守りながら戦ってはいた。しかし、数がいつこうに減らないそれどころか、敵は自分と女の子の方に向かってくるばかりであった。

響（このままじゃいずれ!!）

響がそう思った矢先敵は動き出した。

今までは囲んでいる内の3〜4体ノイズが、迫ってきて響がそれを倒していたのだが、ノイズが一斉に自分と女の子に、迫ってきたのである。

響（せめてこの子だけでも!!）

響は咄嗟に女の子を自分の体で覆い隠し攻撃から守ろうとした。しかし、攻撃は来ることはなかった。

??? 「大丈夫かい？嬢ちゃんたち!!!」

声が聞こえ響は、顔を向けるとそこには、長身の男性が、カッターのような物が着いたシルクハットを片手に、持ち立っていた。しかし、不思議と警戒の必要はないと思つた。それどころか瞬時に、目の前の怪物がノイズを倒し、自分達を守ってくれたことで、自分達の味方だと確信できた。

響「貴方は!？」

??? 「嬢ちゃん達が「誰だ?」って聞きたそうな表情してんで自己紹介させてもらおうが

よ

おれあ、おせっかい焼きのスピードワゴン！よろしく頼むぜ嬢ちゃん！！」
響「はっはい！！私は立花響です！！こちらこそよろしくお願ひします！！」
そう言つて響は再び戦闘の体制に入った。

響 s i d e o u t

世界に新たなる歯車が組み込まれた。

これは偶然か必然かそれは神すらも分からぬ答え。

つづく

邂逅・接触・衝撃の真実の連発その2

未翔と風鳴翼と響そして突如現れたスピードワゴンの四人で、何とかノイズ達を倒すことができ、今は、自衛隊等が事後処理を行っている。

そこで四人それぞれがそれぞれ違うことを考えていた。

スピードワゴン side

スピードワゴンは、戦闘の後から疑問が頭の中を駆け巡っていた。それは、響の首の付け根は、スーツによって隠れているのに星形の痣が見えたことである。

スピードワゴン「一体どうなってやがる・・・」

スピードワゴン side out

翼 side

翼は、何故響がガングニールを自分の片翼でもあった相方と共に失われた物を、纏ったのが分からなかった。

そんなことを、考えていると、響が変身が解除されたことに驚いて、倒れそうになる

とこゝろを助けた。

この後の響の言葉が、ガングニールを纏った理由に近づくものだと、助けた時には、分かるはずもなく……

翼 side out

響 side

響は、武装を着たまま（解除のしかたが分からない）思い出そうと必死だった。

自分と女の子のピンチに突然現れた謎の怪物彼の名を聞いたときに、響は、彼のことを何故か、知っているような気がしたのだ。

響「スピードワゴン……確か承太郎おじさんが前に何か言っていたような……ダメだ思い出せない!!!」

響が一人思い出そうと奮闘していると

女性「あつたかいもの、どうぞ」

一人の女性が暖かい飲み物を渡してくれた

響「あつたかいもの、どうも」

響は、一言お礼を言った後に飲み物を、口にする。

その後、彼女の武装が突如解除され、その拍子に驚いて倒れそうになった。

その後翼に、二年前の話をし、それがその後、彼女からの、宣戦布告へと繋がるなど響は、思いもしなかったであろう。

響 side out

未翔 side out

未翔「さあ、ここから新たな一歩が始まったわけだが・・・」

未翔は変身を解いた後に一人そんなことを呟いたその時、ふと前方を見ると、響とスピードワゴンが手錠をされて、いるところだった。すると、一人の二年ほど前に見たことがある男が、未翔の方に歩いてきた。

緒川「貴方にも来てもらいますよ。二年前の事についても、聞きたいですからね。」

未翔「俺がそれに応じると思うか？」

緒川「まあ、応じないのは分かってましたし、既に手段は取っております。」

未翔「ほー、影縫いか・・・だがやはり詰めが甘いな」

未翔がそう言うのと未翔の姿がどんどん歪んでいく。

緒川「!!」

未翔「あんたらが、俺を既に捕まえに来るのは、分かっているから俺は、既に逃走させ

てもらったそんじや」

そう言い終わると未翔の幻覚が消える

緒川「こちら緒川です。二年前の少年に、逃げられてしまいました。」

弦十郎「やはり、一筋縄ではないか。だが、ガングニールを纏った少女は彼と面識があると思われるから情報は、多少得られるだろう。」

緒川「それでは、また後程」

そう言つて緒川は車に乗りその場を去つていった。

それを近くの建物の屋上から気配を消して見ていた未翔は

未翔「よし、ならボチボチ追跡しますか。武器は神機でシヨート・アサルト・タワーの組み合わせで良いかな。」

そう言つて、目の前に特殊な空間への入り口を作り、武器を取り出し先程緒川が乗つていった車を、建物を飛び移りながら追うのであった。

未翔 side out

響 side

響は、今人生最大のパニックにおちいつていた。

理由は4つある

1つは、スピードワゴンが人間の姿になったこと

2つ目は、スピードワゴンは、自分のひいひいおじいちゃんのジョセフ・ジョースターや、そのおじいちゃんジョン・スターの友人であり家族とも言えるほどの人物だと言うことを思い出したこと。

3つ目は、目は未翔が、この事に関してなにかしら事情を知っていて、更に何故か追われているに近い状態のこと。

4つ目は、目の前の現状である。翼からは微笑みなど必要無い場所だと言われたのに、目の前は正にパーティー会場なのである。

響「微笑みは必要無いんじゃないや無かったんですか？（ジト）」

響はジト目で翼を見た

翼「しよっしようがないじゃない!!」

翼は顔を少し赤くさせながらそう答えた

未翔「そうだと響。ここの司令官は、色々変な方向にぶっ飛んでんだ諦めろ」

響「え!?!未翔!?!」

緒川「一体何処に!?!」

未翔「どこもどこもそりゃエレベーターから」

「ドカン!!」

そう言うのと、未翔は片手に剣と思われ武器を持ってエレベーターの天上を破って落ちてきた。

未翔「まさかここまで落下するとは思わなかったよw」

つづく

邂逅・接触・衝撃の真実の連発その3

二課にいた者全員は、唾然としていた。理由は目の前の未翔にある。

未翔「あれ？なんでそんな唾然としているん？」

その一言で全員が我にかえった

響「いやいやいや今落ちて来たって言ったよね!？」

未翔「それがどうしたの？」

響「どうしたの？じゃないよ!!なんで無傷なの!？」

未翔「そりや俺が頑丈だから!!・・・だよね？」

響「疑問系!？」

未翔「まあ響落ち着け」

弦十郎「そうだなまずは、簡単な歓迎会をしよう!!」

未翔「あんたは、馬鹿か？自分で言うのもあれだが、あんたらが追っていた人間が、武器持って二課に侵入してきたのに、そのまま歓迎会続けようとか正気の沙汰じゃねーぞ？」

響「そう言いながら、ちゃっかりジュースを飲んでる!!」

未翔「まあ、ちっちゃいことは気にするな!!」

そんなこんなで少し落ち着いて来たので話が始まる

弦十郎「未翔君だったね。君には、いくつか聞きたいことがあるんだが」

未翔「1つ目は、何故俺の情報が検索してもほとんど出ないのか。2つ目は、俺の今持っている武器と戦闘時に身に纏っていた鎧について。3つ目は、2年前に俺が言った天羽奏が生きているとは、どういう事なのかだろ?」

緒川「お見通しですか」

未翔「まあね俺に聞きたいこと言ったらこれしか思い付かないからねー」

未翔がそう言った後に翼は未翔の肩を掴んで強く揺さぶった

翼「!? 貴方それは、本当なの!? 奏は、生きているの!?!」

未翔「まあ落ち着け順番に話すから。」

未翔「まずは、何故俺の情報がほとんどでない理由だな。これを、国の個人情報データベースにアクセスした後に、読み込ませれば、理由はおのずと分かるはずだよ?」

そう言って未翔は、六角形のカードのような物を弦十郎に渡した。

弦十郎はそれをすぐに個人情報データベースに読み込ませ検索する。

弦十郎「これは!?!」

未翔の情報が開示されたしかし弦十郎が驚いたのはそこではない。弦十郎は未翔の

名字を見て驚いたのだ。

弦十郎「未翔君君は、桜魏家の人間だったのか……どおりで情報がでないわけだ。」

未翔「そう言うことです。それでは改めて名乗らせて貰いましょう。」

未翔「俺は、桜魏家当主、桜魏未翔だ。」

響「桜魏家？」

翼「桜魏……何処かで耳にしたことがあるが……」

緒川「桜魏家確か、世界中を裏で操っている家系でしたね。その気になれば、世界の核ミサイルを全て射たせることも容易いと聞いたことがあります。」

響「え!?!と云うことは、未翔が今当主つてことは、それだけの権限を持つてると!?!」

未翔「まあそうなるねー」

弦十郎「まさか、現在の当主がここまで若いとは……」

未翔「まあ父さんは、俺が7才の時に死んだから俺が引き継いで当主として動いているよ。」

響「それじゃあ、未翔が学校休むことが多かったのって……」

未翔「うん基本的には桜魏家の当主としての仕事があったからやね。」

弦十郎「君も苦労しているんだな。だが、それでも分からないんだが、何故君は、2

年前あのような行動をしたんだ？」

翼「2年前・・・1つはライブ会場での惨劇もう1つはまさか!!」

未翔「あの、日本中にノイズの幻覚を見せたことか？」

翼「何故あのようなことを起こした!?確かにあの時期はあの惨劇の後に語られた事実で、あの惨劇から生き残った多くの人間が生き残ったと言う理由だけで、酷い仕打ちを受けていた!!だが、お前ならお前の持つ権力なら、簡単に揉み消して被害を無くすことはできただろう!?なのに何故あのような人々を恐怖に落とし入れるようなことをした!?」

未翔「馬鹿かお前は?それじゃ意味が無いだろ!!」

未翔が怒った

翼「意味が無いだど!?本気で言っているのか!?揉み消すだけで多くの人間が救われるのにか!」

未翔「その考えが、おかしいんだよ!!そんなの一時的な物に過ぎないだろ!?それこそもう一度あのとときと同じような、惨劇が起こった時に、またあの時のように事実が明るみに出て批判の嵐が起ころるだろ!!そうしたらまた多くの人々が理不尽な暴力に苦しむことになるんだぞ!!その恐怖を知らない奴等に、どれだけ怖かったのか、どれだけ自分達が生勝手だったのかを思い知らせるには同じ体験をさせるしかないんだ!!それにそれ

は、お前が、それを味わってないから言えるんだ!!ここにいる響は、あの惨劇で大怪我をしてそれでも努力してリハビリを繰り返して学校に復帰してから待ち構えていたのは、正にそれだったんだよ!!生徒達の響を見る目は、常に冷たくて!!平気で響を傷つけようとし壊そうとした!!響は、あの惨劇で十分怖い思いもしたし絶望も味わったなのに、あいつらは!!響をまだ壊そうとした!!あいつらのせいで、響の家族は壊れた!!響も壊れそうになった!!なにも知らない奴等が!!画面の向こうで見てただけの傍観者どもが!!ただ情報を聞いただけの奴等が!!何もかもを荒らした!!実際何人も人間が、耐えきれなくて自ら命を絶った!!場合によっては理不尽な理由で殺された!!やつと戻れた日常を!!あいつらは、他者の日常を平気で壊したんだ!!やつと戻ってくると思っていた日常を!!あの惨劇を絶望を味わった者達が必死に欲していた日常を持ちながら!!日常を求めた奴等から日常を取り上げて平気でいたんだぞ!!それどころか、自分達がやってる行いが、正義だとかふぎけたことぬかして暴力を正当化しようとしたんだぞ!!風鳴翼!!貴様は!!貴様は!!それでも!!情報を揉み消すだけで良かったと言うのか!!?体の傷は、消えようとも傷つけられた奴等の心の傷は、そう簡単には消えない!!最悪死ぬまで消えないことだつてありえるんだぞ!!だが奴等は、自分達が傷つけたことなど棚にあげて平気で仲直りしようとする!!揉み消すだけならこうやって人間の理不尽にさらされる人間が増えるだけなんだぞ!!」

響「未翔もう良いよ!!もう良い未翔がこれ以上傷つかなくて良いよ!!」
響が未翔を止めた

未翔「響なに言ってるんだよ?俺は傷ついてなんか・・・」

響「じゃあなんで泣いてるの!?!なんで涙を流すの!?!」

未翔は自分の顔に手を当てるすゝとてが濡れた

未翔「そうか・・・俺は泣いてたのか・・・」

未翔「少し席を外す」

響「私も一緒に行くよ!!」

未翔と響は司令室から出る

翼「おじさま・・・私は間違っていたのでしようか・・・」

弦十郎「いいや、間違っていないさお前も未翔君も」

緒川「そうですね。これはどちらも正しい答えです。違いがあるとすれば彼は、ずっと先の未来も見据えて2度と同じような出来事で、傷つく人が出ないように考えていた
と言うことですね。」

友里「難しい選択ね」

了子「だけど彼はそれを迷い無く選んでいるように見えたわ・・・」

弦十郎「少なくとも今俺が言えることは、俺らは誰一人として未翔君には敵わない。」

その場の全員「!!」

藤堯「それは、どういうことですか？」

弦十郎「2年前の彼と、さっきの彼の姿を見て分かったんだが彼は、目的のためならどんな対価でも払うタイプの人間だ。」

翼「それはつまり……」

弦十郎「桜魏未翔と言う男は、誰かのためなら平気で腕をも切り落とすどころか、命さえ投げ出す究極にして危険な覚悟を秘めている。」

緒川「一体何が彼をそこまでさせるんでしょう……」

弦十郎「さあな、だがおいおい俺達が、知りたくなくても知ることになるだろうよ。」
この時その場にいた者全員は、その覚悟をしていた。

だが、その覚悟でさえ足りないほどの内容を聞きそして知ることになる桜魏未翔が背負う過去を……

未翔 side

未翔「響ごめん……」

響「えっ!?何が?」

未翔「勝手にお前の過去を話しちゃったことだよ」

響「ううんぜんぜん気にしてないよ!!どっちかと言うと嬉しかったかな?」

未翔「えっ?」

響「だって未翔は、私のために涙を流してくれたし、私のために自分からあんなことをしたと思うとね私を、こんなにも大切にしてくれている人がいたんだって思ってた少しい嬉しかったんだ。あつても!!もうそんな無理は、して欲しくないかなだってやっぱ未翔が傷つくのは、見たくないし。」

未翔「まあ、極力そうならないように努力はするよ。それじゃあ戻ろうぜ。」

響「分かった!!それと私や未来のことも頼ってよね!!」

未翔「はいはい」

二人は司令室に戻って行った

つづく

邂逅・接触・衝撃の真実の連発その4

未翔が帰って来たので話が再開された。

未翔「さつきはすまなかつたな。気を取り直して残り2つの質問だな。」

弦十郎「ああ、ノイズとの戦闘でのあの姿と2年前のあの言葉の意味説明してくれるんだな？」

未翔「まあな、しかしこれから話すことはくれぐれも内密してくれこれは、内容が知れたら最悪この世界だけの話じゃなくなる。それこそ場合によつてはありとあらゆる被害が発生する可能性がある。」

弦十郎「分かった約束しよう」

未翔「なら、話そう」

未翔がそう言つて話始めた。

未翔「それじゃあ、俺に投げ掛けられた質問2つは、今から話す内容と繋がっている話だ。それこそ響にも初めて話す内容だからな。」

未翔「まあ単純明確に言つてしまうと、俺は1度他の世界で死んで、この世界で前世の記憶と経験を持つて新たな人生を送っている。俗に言う《転生者》だよ。」

弦十郎「!?!」

響「転生ってアニメや漫画で出てくるあの?」

未翔「その通りだよ響。俺は、18で最初の人生が終わったその後、神が俺にある理由もあつてもう一度命を与えこの世界に産み落とされたんだ。」

弦十郎「にわかには信じられんな。」

未翔「そりやそうだろう。だから証拠はある。」

弦十郎「証拠?」

未翔「ああ、響お前昔おとぎ話の《希望の歌い手》の話は覚えてるよな?」

響「覚えてるよ。確か、戦場で戦う戦士でありながら、歌も凄くてその歌で、多くの人達に希望を与えて、地球を自分達の物にしようとしていた悪い地底人達との戦いに終止符を付けた英雄のお話だよな?」

未翔「ああ、その通りだ。」

了子「どこか近未来的な話だけど、誰がこれを書いたのか全く分からないのよね?確か」

弦十郎「ああ、しかも何百年も前から存在している話だ。最近は、その続きが日本で見つかったが、政府の話では、つい昨日一部分かった程度だ。」

未翔「その一部ってはさ、希望の歌い手と呼ばれた戦士が、敵との最後の戦いで魔剣

を使い決着をつけたが、その後その魔剣の闇に飲まれて多くの人々を殺したって内容じゃなかったか？」

弦十郎「!!何故君がそれを!?!その内容は、それこそ昨日分かったばかり。内容を知っているのは、それを解説したチームと今日その知らせを受けた俺や極一部の関係者だけのはずだが？」

未翔「そりゃ知ってるものにも、それは俺自身の話なんだから本人が知ってて当然だろ?」

翼「本人!」

響「と言うことは、未翔が希望の歌い手なの!」

未翔「ああ、その通り。まあ、さっきの悲劇で《絶望の歌い手》と呼ばれるようになったがな。」

緒川「しかし、証拠にしては、不十分ですね。」

ビジョン「なら、私が明確な情報を見せましょう。」
そう言つてビジョン・フェニックスが現れた

緒川「青い火ノ鳥!」

突如現れたビジョン・フェニックスに未翔と響以外の全員が警戒した。

未翔「全員警戒しなくても大丈夫ですよ。ビジョンは、俺の分身見たいな存在ですか

ら。まあ、こいつについての説明は、長くなりそうなのでまた今度にさせてもらいます。」

ビジョン「改めてビジョン・フェニックスと申します。気軽にビジョンで構いません。」

弦十郎「未翔君何故ビジョン君は出てきたのかは、説明してくれるか？」

未翔「ええ、ビジョンは、色々な存在に幻を見せることができます。そしてその応用技で、自分の思考や記憶をそのまま幻として見せることもできるのですが、それを応用して記憶を幻影として写し出せるんです。」

了子「なるほどそれで自分の過去を見せるわけね？」

未翔「その通りです。一応証拠に皆さんの数時間前の記憶を1度幻影として写し出しますね。」

ビジョン「それでは、メモリーズビジョン!!」

ビジョンはそう言うのと目の前に全員の数時間前の記憶が幻影として現れる。

弦十郎「これは驚いた。確かにこれは俺の記憶だ!!これは、どれくらい前まで見せられるんだ？」

未翔「俺の記憶を見せる分には、制限はありませんけど、今のようにならぬ他の記憶の場合では半日程度ですね。」

弦十郎「そうか。ありがとう。」

この時了子が、どこか安心したような表情を一瞬だけしたのを、未翔は見逃さなかった。

未翔「それでは、自分の記憶を見せますね。ビジョン頼んだ!!（了子さんは、何かあるな・・・まあいい今は証拠不十分だし保留だな。）」

ビジョン「わかりました。それでは、メモリーズビジョン!!」

その場にいた全員が、未翔の記憶を見たそれは、とても悲しい記憶であった。

救おうとした命が、自分の手によって殺される。

過去の未翔の手によって、何百何千と言う未来が奪われた。

必死に抗おうとしても抗えず闇に飲まれる過去の未翔。最後は彼の仲間が何人も彼の前で命を散らし、その代わり未翔は闇から解放された。だが、その体は、その心は、すでにボロボロであり・・・。。。。まもなくして未翔は、泣きながら死んだ。

そして、神に出会い力を貰ってこの世界に生まれた。

そこで幻影は終わった。

未翔「これが、俺の過去だ。」

未翔以外の全員はなにも言えなかった響とラバック以外は、先程覚悟していた。しかしそれでは、まるで足りなかった。

友里「覚悟はしていたけど……」

スピードワゴン「創造以上で覚悟が、まるで足らなかつたぜ。」

未翔「……そうなるのも仕方ないが、ここでそんな反応しても、もう終わったことだ。だから今は未来に目を向ける事が大切だ。」

未翔「それに、これがあつたから今の俺がある。後悔はしているが、この過去を変え
る気はない。いや、変えちゃいけないな。ここで、自分の過去を変えちまったら、それ
こそ今ここにいて言う事実だつて消えちまうからな。」

弦十郎「君は強いんだな」

未翔「別に強くはありませんよただ、目を背けたらあいつらの死が無駄になる気がす
るから、しっかりと向き合つてただけだ。」

未翔「それじゃあ、気を取り直して続けようぜ。何か質問あるか？」

響「あの鎧は、どういう物なの？」

未翔「あれはマンティシヤン、仮面ライダーマンティシヤンと言って」

未翔「他に質問は？」

了子「貴方の鎧については、分かつたわ。だけど、それがおして最後の1つの質問
と繋がるの？」

了子がそう質問してきた。

未翔「それは、奏さんがあの時死んだ後、神が直接俺にある事を教えてくれたんだ。あの奴が奏さんともう一人を自分と同じ世界に転生させて欲しいと神に願ったらしい。」

翼「なら奏は!!」

未翔「ああ、他の世界で新たな人生を送っているだろう。」

緒川「その生き返られてくれと頼んだ人物とは?」

未翔「それは・・・平行世界の俺だ。」

響「平行世界の未翔? どう言うこと?」

???「そこからは、俺が説明させてもらおう。」

その声と共に、全員の目の前の空間が歪み一人の男が現れた。その男は、未翔の記憶にあった神様の姿をしていた。

弦十郎「貴方は!? まさか神なのか?」

神様「その通り。俺は、あらゆる異世界を司る神の一人名前は、レーベルだから気軽にそう読んでくれ。」

未翔「俺もレーベルって名前なのは、初めて聞いたから少し驚いてるんだが。てか貴方が自分から人の前に現れて説明なんて珍しいな。てか予想してなかった。」

レーベル「まあねー今日休みで暇だったから、未翔の行動見てたら面白そうだったか

ら現れてみたw」

藤堯「神がそんなにルーズで良いのかよ？」

響「神様にも休みはあるんですね!!!」

レーベル「そりや神様だって休みなきや死ななくても精神的にはきついからね」

レーベル「おつと話がそれだね。それじゃあ説明を始めよう。」

つづく

邂逅・接触・衝撃の真実の連発その5

ルーベルは、何をどうしたのか大樹の立体映像を出現させ説明を始めた。

しかし、はつきり言って難しく説明しすぎている。この場にいる8割は頭の上に「？」がついているのが顔を見て分かる。

ルーベル「こう言うことだけど分かったかい？」

響「全く分かりません!!!」

未翔「と言うかこの場の8割ぐらいの人達は、理解できないと思うぞ？」

ルーベル「やっぱそうだよねーなら、未翔説明頼んだ!!!」

この場にいたほとんどの人達は思った

なら何故説明をしたのかと!!

未翔「ハイハイんじや映像を変更して、それじゃあ桜魏未翔の幼稚園児でも多分分かる異世界・平行世界云々の説明講座始めるか。」

未翔「まず、響この三本の道から一本選んでみる。」

未翔はそう言って、映像の中の三本に別れた道を指した。

響「分かった。それじゃあ・・・真ん中の道を!!!」

未翔「分かった。それじゃあその真ん中の道を響がいった結果こうなった。」

未翔はそう言うのと響をデフォルメしたのようなキャラを立体映像の中で動かし真ん中の道を進ませた。

すると真ん中の道の中程まで進むと友達と思われるキャラと遭遇してそのまま一緒に遊ぶ映像に変わった。

未翔「響の選んだ道の場合は、のように友達と遭遇したちなみに他の二つどちらかを選んだ場合右の道は特に何もなく、左の道はノイズと出くわしているよ。」

響「結果が全く違うね。」

未翔「その通り平行世界ってのは、簡単に言えば自分達が選ばなかった選択を選んだ世界なんだ。」

翼「と言うことは、例えばだがノイズが存在しない世界の私達も存在する可能性があると言うこと？」

未翔「そうなるね。他にもシンフォギアが存在しない世界やその代わりとなるものが存在する世界はたまたその二つが存在している世界何てのも何百万・何千万いや、それ以上あると思って構わないよ。」

響「なんかそんな世界のほとんどが想像できないけど理解はできたかな？」

未翔「それなら良かった。ちなみに平行世界は、宇宙ができる前から存在してるから

世界だけならまずいくら存在するか分からないよ。」

翼「それでその事と奏を生き返らせるよう頼んだ平行世界の貴方とは関係はあるの？」

未翔「一応関係はあるが、そもそも俺らは特殊な存在でな、元々同じ人間が原点には常にいるんだが、何処かで運命がそれぞれが色々な方向に変化するんだ。」

響「それじゃあ、さっきの説明と同じだよな？」

未翔「まあ簡単に言えばだよ、俺らの場合はどおしてかそれぞれが全く違う運命をたどるんだ平行世界の同一人物なのに大きな分岐では何一つすら被らない。」

未翔「それこそ、生まれた経緯や体験した事柄、住んでる場所他にも何をなして英雄となつたかまで全く違う。共通点と言えば、俺らは全員何かしらのことをなして人々から英雄と言う称号を貰つて死んでいることだけだ。」

弦十郎「なら、未翔君達の原点も英雄と言うことなのか？」

ルーベル「うーん彼は英雄を越えてるんだよね・・・」

未翔「確か、俺らの原点は今神様やつてんだよね？しかも全ての神話の神の上に立つ存在だったよな？」

ルーベル「そうそう英雄からいきなり神頂点に昇格するとか前代未聞で驚いたのはよ覚えてるよ。」

未翔とルーベル意外はその場で嘔然としていた。

まあ、当然と言えば当然であろう。目の前の人物ですら英雄の生まれ変わりなのにその人物の原点は、まさかの全ての神の上に立つ神なんて聞かされて嘔然としない方がおかしい話なのである。

ルーベル「それじゃあ、僕はここらで退散するよ。また何かあつたら来るねーバイバーイ♪」

ルーベルはそう言うのと消えてしまった。

未翔「それじゃあ、俺らも一度解散しますか？話した情報の量が量ですし。結構時間もたつてますので残りは明日にした方がいいと思うんですがどうですか？」

弦十郎「そうだな今日は、これで終わりとしよう。また明日にここに来てくれ時間は後でこの端末に送る。」

弦十郎はそう言うのと未翔と響に通信機と思われる機械を渡した。

未翔「分かりましたそれじゃあ、お休みなさい。」

弦十郎「未翔君一人で帰って大丈夫なのかい？」

未翔「大丈夫です校門周辺で仲間に乗って貰っているのです。彼らのことも明日話しますね。」

弦十郎「そうか。響君はどうする？」

響「私も未翔と途中まで行くので大丈夫です。」

弦十郎「そうかなら良かった。それじゃあまた明日よろしく頼む。」

未翔・響「分かりました!!」

そう言つて未翔と響は、エレベーターに乗つて地上の階まで出た。

未翔 side

俺と響は地上に出た後話ながら帰つていた。

響「にしても今日は、驚くことの連続だね♪」

未翔「それにしても響は嬉しそうだな?」

響「うん!! だつて未翔のことがまた少し分かったからね♪」

未翔「そうか」

響「それとき、その話し方もうそろそろ戻していいんじゃない?」

未翔「そうかなら・・・は・・・疲れた・・・」

響「お疲れさま。と言うか、話し方とかどうにかすれば、そんなに疲れなくてすむんじゃないの?」

未翔「正論だが、僕の人見知りが激しい性格がどうにかならないと無理だよ」

響「まあ、少しづつ頑張つていけば問題ないよ!!」

未翔「そうだね。ありがとう響。」

響「どういたしまして♪」

未翔「そう言えば、響お前はこれからどうするんだ？シンフォギア奏者としての力があるからには、多分て言うかきつと戦わなければならぬよ？」

響「それは、分かっているとどうか昔からその覚悟はしてたつもりだよ？」

未翔「昔から？」

響「うん、未翔私の首筋に星の形の痣が、あるの分かる？」

響はそう言つて首筋を見せた。そこには、確かに星形の痣があった。

響「これはね、先祖代々のものなんだつて今はもう亡くなつた承太郎おじさんが言つてたんだ。」

響「その時にね・・・こうも言つてたの自分達の家系は、元々ジョースター家と呼ばれるイギリスの貴族の家系で、私のお祖父ちゃんのお祖父ちゃんジョナサン・ジョースターから、色々な過酷な運命が始まつて・・・その因縁は、承太郎おじさんが高校生の時にもあつて、大切な仲間がそれが原因で死んでしまつたとも言つてた。」

響「他にも、もしかしたら私にもそんな過酷な運命が、待ち構えてるかも知れないそれこそ、命を落とすかもしれないような過酷な運命が待つてることだつて十分に有り得るとも言つてたんだ・・・」

未翔「響……」

響「私ね、その時はまだ小学生だったから、そんなに気にしてなかったの。それこそ2年前のあの時までには忘れてたぐらいに……だけど2年前のあの時承太郎おじさんが言った今のことを思い出したの!!」

響「そして私は直感したの……ここから先自分には、過酷な運命が待っていることを……だから、覚悟はしてたの……」

未翔「そっか……」

響「ねえ未翔……私怖いよ承太郎おじさんの言つてたことが本当なら、未来や未翔他にも城ノ内さんやフラワーのおぼちゃん翼さんも命を落とすかも知れない……私怖いよ自分の目の前で人が死ぬのが……灰になるのが怖いよ……」

響は、未翔に抱きつき泣いた……この状況はいたって当然と言えるだろう。

2年も前から自分の運命ん覚悟し、前を見てきた彼女は、その恐怖を不安を誰にも言えないそんな2年もの間笑顔を皆にみせていたのだ。

それが、やっと大切な人に話せ楽になったのだ、恐怖が体を支配していたかもしれない、不安が常に彼女を襲っていたかもしれないそれなのに彼女は、つい先ほどまで平気な顔をしていたのだ。

彼女の今この状況を誰が否定できるだろうか？

彼女は、運命の歯車が本格的に動く前から、その運命と向き合ってきたのだ。

誰よりも優しい彼女を休ませることは、神も許してくれるだろう。

未翔「頑張ったね辛かったね怖かったねだけでも響は、一人じゃないんだよ？僕がいるきつとこれからも響を支えてくれる人たちは、たくさん現れるだからもう安心していいんだよ？だから、今は存分に泣けばいい2年間泣けなかった分も泣けばいいよ。」

未翔は、優しく震えている響の背中をさすった。

響「怖かったよ!!!辛かったよ!!!」

未翔「うん!!うん!!」

二人の声は、その場に木霊することは、無かった。

しかし、近くの木の後ろでそれを静かに聞いている剣の姿はあった……

10分程の時間が経過し、響は泣き止んだ。

響「ありがとねそれとごめんね服濡らしちゃって」

未翔「別に気にしちやいなーよ。そう言えば、さっきの質問の答え聞いてなかったな。

まあ、聞くまでも無いと思うがな。」

響「勿論私は、戦うよ。この力例え貰い物でも今使えるのは、私だけだし。きつと最

初は足手まといだろうけどよろしくお願いしますね!!翼さん!!」

翼「気づいてたの!？」

木の後ろから翼が少し驚いた表情で現れた。

未翔「カカカ!! そりや髪が隠れきれてなかったからな w w w w w w w w w w」

翼「なっ!! // //」

翼は自分の失態に気づき顔を赤く染めた。

響「それじゃあ!! 二人ともお休みなさい!! また明日!!」

響は、そう言うのと走って行った

未翔「イヤー本当響が、もとに戻ってよかつたよかつた♪あのままだったら響らしくねーからな♪」

未翔「それじゃあまた明日それと、さつきはすまなかつたな・・・つい頭に血がのぼちまつて怒鳴つちまつた・・・翼さんも大切な人をあの時失つてるのにな・・・」

翼「私の方も少し軽率だったわ。こちらこそごめんなさいね。」

未翔「ふふなんと言うか、あんま見ない翼さんを見て良かったよ♪」

翼「私もそこは同じとだけ言わせてもらうわ。」

未翔「・・・聞かれてたのかよ」

翼「しつかりと」

未翔「まあいいでしょう。それじゃあお休みなさい。」

翼「ええ、お休み」

未翔は翼と別れ校門の前までたどり着いた。

??? 「マスターどうでしたか？」

未翔 「いい場所だったよ♪それと明日は、二人とも皆に紹介することになったよ。」

??? 「面白そうな人は勿論いたんでしょ？お兄さん」

未翔 「まあ、それは明日のお楽しみって奴だ。」

??? 「それは結構気になるねー」

未翔 「まあ今は、早めに帰ろうぜ。ルーラー・アーチャー」

そう言つて未翔は、二人と帰つて行つた。

つづく

王と聖女と決闘と防人とその1

未翔 side

僕は、昨日の一件から仲間と家に帰り、夕食をすませた後に熟睡起床後は、いつも通りの生活を過ごした。

昨日の一件は、確かに色々大事ではあるだろうが、仕事の関係で悲しいかな・・・日常的な光景の一欠片にすぎないのであった・・・

未翔「うん・・・振り替えると実は、生命の危機に何度も出くわしてるんだよね・・・感覚がどんどんズレて行っているのが嫌でも分かる（涙）」

僕は、そんなことを思いながらも仕事で使用する部屋に入った。仕事の仕事で、高校には行けてはいないが、もう少ししたら落ち着くのでしたら、高校の編入も考えている。

未翔「さあ!! さつさと終わらせませますか!!」

僕は、そう言って気合いをいれ仕事を開始した。

それからモクモクと作業を続け終わった時時計を見ると、丁度良い時間だったので、僕はルーラーとアーチャーと共にリディアンへ向かった。

未翔 side out

響は、翼と途中で偶然あつた未翔と未翔の関係者と思われる二人と共に、今はエレベーターに乗り2課へ向かっている。

響「未翔その二人は？」

未翔「あーそれについては、2課についてから説明するから。今は、僕の関係者と言うことだけ頭に入れておけば問題ないよ。」

響「分かった。」

二人がそんな話をしてしていると、エレベーターは止まり2課に到着した。そこには、昨日のメンバーがすでに揃っていて、更に、女性が二人増えていた。彼女二人がラバックの言っていた残り二人の転生者の事だと何となく分かった。

弦十郎「二人が揃ったので、早速だが話をしていこう。ところで、未翔君きみの後ろにいる二人は？」

未翔「二人は、僕の関係者ですけど説明が少し長くなると思うので、先にそつちの話をお願いします。」

弦十郎「分かった」

昨日響と何故か未翔にも行われたメデイカルチェックの結果発表これは、一応未翔も響も問題は無かった。その後の話は、響が何故シンフォギアを纏うことができたのかと
言うことであつた。これについては、2年前の事故で、響の胸に刺さつたガングニールの破片が、響と共に鳴したことで起こつた他に類を見ない現象だそうだ。

ついでにシンフォギアがどういうものかと言うのも説明された。まあは、普通の人間には分からない説明だつたが。

了子「どう？理解してもらえたかしら？」

響「前々分かりません。」

未翔「だろ。うな。普通は理解できん。まあ、超簡単に言えばシンフォギアは、歌が発動の鍵となる兵器であり、現在ノイズに対抗できる唯一の手段と言うことだ。」

響「なるほど分かつた。」

弦十郎「未翔君のいつた通りシンフォギアは、唯一ノイズの戦う手段だ。どうか、その力を貸してくれないか？」

響「私が、どこまでやれるか分からないけど、やります!!」

弦十郎「そして、未翔君の力も貸してくれないだろうか？」

未翔「ええ、構いませんそもそも、この力は人の未来を守るために生まれた力ですから。」

弦十郎「そうか!! ありがとう。」

未翔「それじゃあ次は、僕の関係者二人の説明をしましょう。」

弦十郎「ああ、よろしく頼む。」

未翔「まず、二人について話すに当たって、これから先の話は国には話さないでください。これから話すことは、それだけ使い方を間違えば危険な代物ですから。」

弦十郎「分かった。」

未翔「それでは、まず二人に話すに当たって、必ず必要な話を先にしましょう。魔法や魔術の存在について」

緒川「魔法や魔術が、彼らに関係がある?」

未翔「ええ、僕は、一応魔術師です。」

『え!?!』

響「いやいやいやいやちよつと待って!!」

未翔「なに?」

響「なに? じゃないよ!?! 今さらつと重大なこと言ったよね? 未翔君魔術師だったの!?!」

未翔「そうだけど?」

緒川「ここまでさらつと言われるとは……」

未翔「んで話戻しますね。それで魔術師には、まあ色々な系統が存在したりするわけです。その中の1つにサーヴァント召喚があります。」

翼「サーヴァント召還？」

了子「使い魔を召喚することよね？たしか」

未翔「ええその通りです。」

スピードワゴン「つてことは、後ろの二人はその使い魔つてことか!？」

未翔「ええ一応そうですね、二人は普通の使い魔とは、格がそもそも、違います。」

???「そうだね。僕達は、使い魔より上院存在『英霊』だよ。」

弦十郎「英霊と言うことは、後ろの二人は、元々は英雄だった人間と言うことで良いのか？」

未翔「ええ、二人とも自己紹介した方が良さそうですね。聖杯戦争で呼び出された訳じゃないから、真名も名乗って良いよ。」

???「分かりましたマスター。」

???「私は、ルーラー真名は、ジャンヌダルクと言えば分かりますよね？」

翼「ジャンヌ・ダルク!？」

了子「ジャンヌ・ダルクってあの聖女ジャンヌ・ダルク!？」

???「いきなり大物が出てきましたね。そう言えば、私も彼等には、名乗っていません」

でしたね。私は、シェーレです。よろしくお願ひします。」

ジャンヌ「気軽にジャンヌで構いませんよ。」

???「次は、僕だね。僕は、アーチャー真名はギルガメッシュよろしくね」

了子「次は、メソポタミア文明の王様!？」

???「おー聖女の次は、王様ですか!!名前まだ言つてませんでしたね。私は、セリユーです!!好きなものは正義です。嫌いなものは悪です!!よろしくお願ひします!!」

ギル「よろしく。僕は、ギルで構わないよ。それと、君セリユーつてだったよね?これだけは、言つておくよ。正義か悪かは、立場や見方や考え方で一変するものだから、君の正義が必ず他者の正義と同じ何てことは、あり得ないよ。」

セリユー「なるほど・・・ありがとうございます!!」

このように、自己紹介が終わった直後突如アラムが2課全体に鳴り響いた。

つづく

王と聖女と決闘と防人とその2

静かな夜誰もその場所にはいなかった。3人を除いてはだが……

未翔「今は周辺に結界を張ってあるから、どんなに暴れ絶対に気づかれませんし、結界を解除すれば、壊れた地形も戻りますので存分に戦えますよ♪」

まるで新しいオモチャを買って貰った子供のようなテンションの未翔の声がその場に軽く響いた。

翼「そう……それならばこの防人心置き無く戦える!!」

彼女は、真剣な表情で、冷静にそう返答してはしているが、どこかワクワクしている様子が、声から聞き取れる。

案外この二人は、どこか似た者同士なのかもしれない。

未翔「フフフ……決闘者（デュエリスト）としての思考が早く防人と戦いたいと言っているし、始めましょう♪」

未翔はそう言うと、腕についている機械を構えた。

すると、翼もその手に持つ剣を構え直し……

翼「いざ……尋常に勝負!!」

未翔「デュエル!! スタンバイ!!」

二人は、同時にこう叫ぶと同時に戦いの火蓋が切られた!!

しかし、多くの者は思うだろう。『何故この二人が、戦うことになったのか?』……と。それを知るには、ほんの少し前そうアラムが2課全体に鳴り響いた所まで戻る……

突如2課全体にアラートが鳴り響いたことで、未翔達は、何が起こったのか事情を聞くともたノイズが現れたらしい。

未翔は、最近ノイズの発生量が異常に多いことに不信感を覚えながらも、ギルとジャ

ンヌは2課に待機させ、翼と響の3人でノイズの殲滅に向かった。

未翔は、この時戦闘に使用するため、異空間からスマートフォンよりも少し大きめの機械を取りだし右腕に装備していた。

その後は、あつという間であった。

翼の圧倒的な手数で殆どのノイズが倒され、残ったノイズは、響と未翔の右腕に付いている機械で現れたと思われる騎士によって倒された。

響「私、まだまだダメダメの新人ですけど、改めて、これからよろしくお願いします
!!」

翼「そうね。だけどその前に私と戦いましょうか？」

翼の予想外の返答に響は、啞然としていた。

響「え？戦う？なんでです!？」

翼「今の貴女の全力を見たいの。だから、戦ってもらおう!!」

そう言って1度翼は、響と距離をおき剣を構えた。響も、決心がついなのかぎこちないが、未翔に教わった護身術の構えを取り、戦闘が開始された。

が、響はあっさりやられてしまった。まあ当然と言えば当然の結果である。

響「やっぱりダメだったか」

翼「予想よりは、動いていたけどやはり鍛える必要があるわね。」

未翔「そりやそうですよ。初めてシンフォギア纏ってまだ、1日程度しか経過してないんです。これで使えてたら、相当ですよ。」

翼「まあ、それはそうね。」

未翔「それで、翼さん」

翼「？」

未翔「次は、僕と戦いませんか？と言うか、戦いましょう!!」

翼「それは良いが、いきなりどうした？」

未翔「翼さんと響の戦いを見ていたら、久しぶりに本気で戦ってみたくなかっただけです。」

翼「良いだろうこの防人が、全力であいてをする!!」

.....こうして、今に至る。

翼「先手は、私がもらう!!」

そう言う翼は、上空から無数の剣を落下させる広範囲技『千ノ落涙』を放った。

未翔「いきなりですか!!なら、『防御魔法』展開!!」

未翔がそう言い左手を前に出すと、手のひらを中心に魔方陣が現れ、落下してくる剣

のほとんどを防いだ。

しかし、全ては防ぎきれなかったらしく体の所々に軽い切り傷が幾つか出来ていた。

未翔「やつぱり・・・防ぎきれないよね・・・!!」

(ライフ8000↓5500)

翼「やはり、ほとんど防がれてしまったか・・・」

未翔「なら次は、僕のターン!!ドロー!!」

翼「カードだど!?まさか先程のノイズも、カードで戦っていたのか!?!」

未翔「ええ。しかしこれは普通のカードではありませんよ。と言うか、大抵のカードゲームのカードに同じこと言えるんですけど、あのカードそれぞれに強力で特殊な

封印が施されているんです。」

翼「封印?」

未翔「ええ。その封印は、カードを門としてそのカードのモンスター達が自分達の世界から、出てこられないようにしてある封印だそうです。まあ、ここ最近はその意味があんまり無いらしいですけど。」

翼「もしかしてあなたは、その機械によって門を開いてモンスターを召喚・命令できるってこと?」

未翔「半分正解です。まあ、残りの答えは勝負のあとで話しますよ。・・・僕は、『黒

牙の魔術師』をペンデュラムスケールにセッティング!!そして、更に永続魔法『星霜のペンデュラムグラフ』を発動し、モンスター1枚とカード1枚をセットしターンエンド!!」

翼(あの裏側で設置したカード・・・多分攻撃を誘っている・・・しかしここは!!) 翼「攻めるのみ!!その裏向きのモンスターを攻撃させてもらう!!」

翼はそう言うと、大剣型のアームドギアを展開しそれを振るい、放つエネルギー刃の攻撃『蒼ノ一閃』によりセットされていたモンスターが、破壊される。

しかし!!

未翔(ニヤリ)セットされていたモンスター『メタモルポット』のリバーズ効果発動!!このカードがリバーズした時発動し、お互いのプレイヤーは、手札を全て捨て新たに5枚ドローする!!」

翼「ここで、戦略の幅を広げてくるか!!」

未翔「その通り!!更には、カードでの戦闘ではない翼さんには適用されない!!」

翼「くっ!!そこまで見越しての作戦見事だ!!だが、まだ攻撃は、終わってない!!」

そう言い翼は、手に持つ大剣型のアームドギアを通常サイズに変化させ一瞬で未翔の懐に入り込み攻撃をしかけてきた。

未翔「くっ・・・!!」

(ライフ5500→3500)

スピードワゴン「なんて早業だ!!あの一瞬で未翔の懐に入り込み攻撃したのもそうだが、すぐに次の手に移る判断力もそうとうだぞ!!」

画面越しで見ているスピードワゴンは、翼の攻撃に驚いていた。

未翔「……まさか、あの一瞬で懐に入り込まれるなんて……ドロー!!」

未翔「僕は、手札から魔法カード『テラフォーミング』を発動!!デッキからフィールド魔法を1枚手札へ!!僕は、『天空の虹彩』を手札に!!そしてそのままフィールド魔法『天空の虹彩』を発動する!!そして、このカードの効果を発動!!『天空の虹彩』の効果は、自分フィールドの表側表示のカードを破壊することで、デッキから『オッドアイズ』カードを手札に持つてこれる!!僕は、『黒牙の魔術師』を破壊し、デッキから『オッドアイズ』カードを手札へ!!」

未翔「更に、『黒牙の魔術師』を破壊した時他に2つの効果が発動!!まずは、『黒牙の魔術師』の効果で、このカードが、戦闘・効果で破壊された場合自分の墓地から、闇属性・魔法使い族モンスターを対象に発動でき、そのカードを特殊召喚する!!来い!!『E Mトランプ・ガール』を表側表示で特殊召喚!!」

未翔「そして、次は『星霜のペンデュラムグラフ』の効果で自分のペンデュラムモンスターが自分のモンスターゾーン・Pゾーンを離れた場合1ターンに1度だけ発動可能

!!デッキから、『魔術師』Pモンスターを1枚手札へ!!」

スピードワゴン「なんと言うコンボ!!ありや相当自分のデッキを使い馴れてやがる!!」

未翔「次に俺は、『白翼の魔術師』と『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』でPスケールをセッティング!!そして、魔法カード『揺れる眼差し』を発動!!Pゾーンのカードを全て破壊し、破壊したカードの数によって能力を発動する!!僕は、2枚破壊したのでデッキから、Pモンスター1枚を手札へ!!」

未翔「Pゾーンに『紫毒の魔術師』をセッティングしてターンエンド!」

翼「打つ手が無くなったようだな!!なら、これでラストだ!!」

翼は、その言葉同時に『逆羅刹』を放った。

未翔「防御魔法展・(翼「かかったな!!」)なにつ!!」

翼は、未翔が、防御魔法を展開する直前に『影縫い』で未翔の動きを封じた。

翼「これで!!最後!!」

翼は、上空へ高く舞い上がると、『天ノ逆鱗』を放った。これだけの大きさの攻撃だ守備表示のトランプガールを破壊し、なおかつ多大な貫通ダメージをうけることになるだろう。

未翔「ここまでか……」

未翔「……………ナンチャッテ!!」

翼「!?」

未翔「僕は、永続トラップ『時空のペンデュラムグラフ』を発動し、効果で1ターンに1度だけPゾーン・モンスターゾーンどちらかの『魔術師』Pモンスターカードを1枚と、相手のフィールドのカード1枚を対象に発動でき、そのカードを破壊する!!」

翼「まさか!!」

未翔「そのまさかさ!!俺は、自分の『紫毒の魔術師』と翼さんのその巨大な剣を選択!!破壊する!!」

翼「ぐっ!!だが、まだ『影縫い』が残って（未翔「それはどうかかな?」なに?）」

未翔「俺は、『紫毒の魔術師』の破壊された時の効果を発動!!相手の表側表示のカード1枚を破壊する!!この効果で、『影縫い』を破壊!!」

翼「『影縫い』が!!」

未翔「更に『星霜のペンデュラムグラフ』でデッキから、『魔術師』Pモンスターを手札へ!!」

未翔「さあ、真の最後を見せてやるよ!!……………ドロー!!……………」

翼（ああ、多分良いカード引けなかつたんだな……………）

未翔「まっまあ気を取り直して、僕は、『アストログラフ・マジシャン』と『虹彩の魔

術師』でPスケールをセツティング!!現れよ!!『黒牙・紫毒・白翼の魔術師』そして、『オツドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』!!」

翼「魔術師3名略称されてる!!?」

未翔「流石に疲れた(作者目線)」

翼「メタいい!!」

未翔「それじゃあ戻りますよ?僕は、墓地の『貴竜の魔術師』の効果を発動!!『オツドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』のレベルを3下げる代わりに『貴竜の魔術師』特殊召喚!!」

未翔「更にその2体でシンクロ召喚!!現れよ!!『オツドアイズ・メテオバースト・ドラゴン』!!このカードの効果で、召喚成功時にPゾーンのカード1枚を特殊召喚する!!『アストログラフ・マジシャン』を特殊召喚!!」

未翔「そのまま効果発動!!モンスターゾーン・Pゾーンにある『黒牙・紫毒・白翼・虹彩の魔術師』と『アストログラフ・マジシャン』を除外して・・・融合召喚!!」

未翔「降臨せよ!!『霸王龍ズアーク』」

未翔意外の者達は、このモンスターが登場に啞然とした。

翼「なんて威圧感!!凄まじすぎる!!」

未翔「『霸王龍ズアーク』の能力発動!!相手のフィールドのカード全てを破壊する!!」

翼（全てを破壊する能力……圧倒的過ぎる!!）

翼がそう思ったその時、翼の姿はシンフォギアから、リディアン製の制服に戻っていた。

翼「なっなんで!？」

未翔「多分シンフォギアが、装備魔法に近い扱いだったので、ザークの能力の影響で一種の強制解除が起こったんだと思います。」

翼「なるほど……しかし決着はつかなかったわね。」

未翔「ええ。次の機会ですわ」

翼「ええ。次こそは、負けないわ」

未翔「それは、こっちもです!!」

この後、未翔は、風鳴司令に説明したり右腕の機械目的で子さんに追い回されたり大変だったとか。

ちなみに響は、

響（未翔と翼さんの勝負が凄すぎて私空気が!）

こんな感じだったとか。

再開の夜

未翔と翼の戦闘から早くも数週間が経過した。スピードワゴンは、今は無き自分の財団が最後に残した別荘で資料等を集める為に、今は日本にいない。

響は、風鳴司令との色々ぶつ飛んだ修業もの成果もあつてか、アームドギアは出せていないが、シンフォギアを少しづつ扱えるようになりチームワークも良くなってきたことが、目に見えるほどになってきていた。これからだと未翔もそう思っていた。

しかし、そんな矢先に未翔は、悲劇的な更には最悪の形で再会を果たしてしまうことは、今はまだ知らない。そして、今の時はその再開の数時間前未翔は、先日の翼との戦闘後風鳴司令の提案で、リディアンに特別学生として入学することになり、それに便乗してギルガメッシュと更には、それに巻き込まれる形でジャンヌもリディアンに転入することになった。

未翔「はー……やつと授業が終わった……死にそうだ……」
未翔は、今にも魂が抜けそうな声でそう言った。

響「高校の授業は、大変だよねー」
未翔「響は、眠ってるだけでしょ？」

??? 「ビツキーは、もう少し寝ない努力が必要だよね」

未翔 「創世の言う通りだぞ？ 響・・・お前は寝すぎだ・・・それに、俺は、その逆だ。覚えてる授業内容をまた聞かされるとか1種の拷問だぞ？」

??? 「あれを覚えてるとかアニメのキャラなんじゃないの？ 貴女!？」

未翔 「おい！ 詩織人の性別を勝手に女にすんな」

??? 「そう言えば、未翔って女子を下の名前で呼ぶよね？」

未翔 「あーそう言えばそうだな。ちなみに、特に理由は無いぞ。下の名前の方が、なんとなく呼びやすい気がするだけだ。」

未翔は、授業が終わりなんて事の無い雑談を響と未来そして、クラスメイトの安藤創世、寺島詩織、板場弓美の6人でしていた。

未翔 「そう言えば、響お前急いでレポート提出しないと行けなかったんじゃ？」

響は、未翔の一言で思いだし慌ててレポートを持って教室を出た。未来もそれを追いかけて教室を出たのだった。

詩織 「あの子大丈夫かしら？」

未翔 「大丈夫だろ？ 死ぬわけじゃあるまいし。」

創世 「ミーポーは、生きる死ぬが前提で話すよね？」

未翔 「まあな、生きてりゃ大抵どうにかなるが、死んだらもうどうにもならんから

な・・・」

未翔は、寂しげにそう言った。

未翔「てかさっきのミーボーって俺のこと!？」

弓美「今気づいたんだ。」

未翔のテンションの変化に創世たちは、驚きながらも、話は、進み響が教室を出てから30分ほどが経過した時に風鳴司令から貰った通信端末にノイズ出現の連絡が入った。

未翔「悪い急用できたから、俺帰るわ。」

未翔は、そう言って教室を出ようとした時に、今日響が未来と流れ星をみる約束をしていたことを思い出し、3人に、未来と流れ星を見に行ける人がいるかを簡単な理由と共に話、結果創世が未来と流れ星を見に行く事になった。

未翔「ありがとうな創世。あと、これでビデオ撮っておけよ。このカメラなら、星とかよく撮れるから。」

そう言って未翔は、カメラを創世に渡して教室を出た。

そして、時は進み今は夜。未翔は、自分の召喚した『オッドアイズ・ペンデュラムドラゴン』に股がりノイズを蹂躪していた。

未翔「……………二人と分断させられたのは、まだ良いがうん原作の知識の殆どが思

い出せない・・・もうすぐ何かあったような無かったような・・・考えてても仕方ねえ。早く二人と合流しねえとな!! 『螺旋のストライクバースト』!!」

未翔は、考えることを一時停止させ合流するために『オッドアイズ・ペンデュラムドラゴン』の技で頭上に地上への穴を開けてそこから地上へと出た。

地上へ出て最初に目に入ったのは、ノイズに捕縛された響と、何者かと戦闘を行っている翼の翼だった。

未翔「翼さんと戦ってるのは、だれか・・・えっ?・・・」

未翔は、翼と戦っている人物の顔を見たとき蘇った。

2年前の悲劇のライブの数日前に起こった事件が、彼女との約束を果たせなかったあの日の事が、自分の無力さに後悔してもしきれないあの日のことが・・・

それと同時に未翔の心に封じていたあの時の思いが今の感情と共に溢れ出した。

彼女が生きていたことへの喜び、あの日の悲しみ、自分に対しての怒り、憎しみ

未翔「あつあああつあー!!!あー!!!」

溢れ出した感情が、未翔を蝕み未翔は膝をつき頭を抱え悲痛の叫びを上げた。

響「未翔?!未翔!!!」

大切な者の声も今の未翔には聞こえないただ彼は、悲痛な叫びをあげ続けていた。

未翔「あああああ・・・ク・・・リ・・・ス」

響「未翔ー！！」

未翔は、倒れた。

その後翼も絶唱を使用し、そのダメージで重傷その後を駆け付けた弦十郎達により、二人は病院へ運ばれて行った。

場所は変わってイギリス

スピードワゴン「ここが、スピードワゴン財団が最後に残した場所か……まさかとは思ったが、もう一度ここに来ることになるとはな……」

そこは、約200年ほど前にジョースターの血を受け継ぐ者の因縁が始まった場所。

『ジョースター邸』

これは、スピードワゴン財団が、スピードワゴンの亡くなった後にジョースター邸跡地に、当時の設計図等を元に新たに建てた物だった。

スピードワゴン（まさか、ジョースターさんから始まったディオとの因縁が、形を変えてあなたの孫ジョセ・ジョースターに降りかかり、更にその息子や孫にも続くとは、誰も想像できなかっただろうな……）

スピードワゴンは、ジョースター邸を見上げそう思っていた。すると、後ろから足音

が聞こえきた。

??? 「君は!! スピードワゴンくんじゃあないかね!？」

そう言われ、スピードワゴンは、驚きながらも後ろを向き、更に驚いた。
スピードワゴン「あっあんたは!!!!」

つづく

もう1つの出会いと出会いの予兆

未翔達が大変なことになっているころ、時を同じくしてもう1つの歯車が動き出していた。

ここは、リディアン校内にある森林そこに2人の異形が倒れていた。

1人は、ライオンと雷神を合わせたような見た目をし、もう1人は、ブリキの兵士を思わせる見た目をしていた。

??? 「・・・ここは何処だ？何故俺は生きている？全く分からねえ!!腹立たしいぜ!!お前も起きろアイガロン!!」

ライオンのような異形は、目を覚ますや否やいきなり怒りを露にしながら、隣で倒れているブリキの異形の名前を言いながら叩いた。

アイガロン「イツタイナー・・・ってドゴルド!?生きてたの!?てか、なんで俺様生きてんの!？」

ドゴルド「俺に聞くな!!俺だって何故生きてんのかわからねーんだよ!!あーイライラするぜ!!」

アイガロン「再会したのにここが何処だかもなんで生きてんのかも分かんないなんて染みるわーってあれ？」

ブリキの異形アイガロンは、ライオンの異形ドゴルドの足下に見覚えのある2つの品が落ちている事に気がついた。

アイガロン「ドゴルドその足下の、ガブリボルバーと獣電池じゃない？」

ドゴルド「なに!？」

ドゴルドは、足下にあつたそれを拾い上げた。

ドゴルド「こいつは!?!トバスピノの獣電池と覚醒前だが、確かにガブリボルバーだ!!」
ドゴルドは、その二つがあることに驚いのもつかの間足音が聞こえ二人は、そちらの方を向いた。

足音が徐々に近くなるにつれてその姿も徐々に見えてきた。それは、二人の少女だった。

未来 side e

私は、今日一緒に流れ星を見れなくなった響の代わりについてきてくれた安藤さんと、星を見て帰ろうとしたとき、誰に呼ばれた気がして声のした方へ走っていった。急に走り出した私に驚きながらも安藤さんも追い付いてきていて、気がついたらリディア

ン校内の森林の前にいた。

創世「ヒナどおしたの!?!いきなり走ってここまで来たりして」

未来「誰かが私を呼んだ気がしたの。」

創世「え? 私には、何者聞こえなかったけど?」

安藤さんがそう言ったとき、森林の中から誰かの話してる声が聞こえたので、二人でその声を頼りに森林の中を進んだ。

声が聞こえた場所に辿り着く少し前にその声は、聞こえなくなったが、そのままさつきまで声の聞こえた場所に進んで行く。すると、近づくにつれて少しずつ声の主だったのであろう二人の姿が見えはじめ、完全にその姿が見えるようになった時には、内心驚いた。

ライオンの顔をした人形の異形と、ブリキの人形を思わせる異形がそこはいたのだから。

未来 side out

未来は、最初被り物かとも思ったが、直感的にそれは違うと思った。創世もそれを分かっただけか、けいかいしている。

相手も表情は変わらないが、驚いているようすでした。

アイガロン「どうしよう!! どうしよう!! 人間に見つかったよ!!」

ドゴルド「うるせえ!! 驚くことでも無いだろ!! 腹立たしい!!」

創世「わ、私は安藤創世でこっちは、小日向未来。貴方達は?」

創世が、意を決して自己紹介をした。

アイガロン「これは、ご丁寧にも。俺様は、悲しみの戦騎アイガロンで、さつきから怒ってるこっちは、怒りの戦騎ドゴルドだよ。」

ドゴルド「何自己紹介してんだよ!」

未来「あつあの〜ドゴルドさんとアイガロンさんは、なんでここにいたんですか?」
未来も覚悟を決め手質問をした。

ドゴルド「それは、こっちが聞きたいほどだ。それと、俺もアイガロンも『さん』はつけなくて良い。」

アイガロン「そうだね。なんでここにいいのか全く分からないし、そもそもなんで俺達生き返ったのかさえ分からないんだよね〜」

未来・創世「生き返った!」

未来達は、驚きながら死んだ理由や二人の過去について話してもらった。そうしている内に、アイガロンとドゴルド二人のいた世界は、自分達の世界とは違う世界だと分かった。

アイガロン「ここが、俺様達の知ってる世界じゃないと分かったのは良いが、これからどうするドゴルド?」

ドゴルド「どうするも、この世界にはキョウリユウジャーどころか、デーボス軍もねーんだ。どうにもできねーよ」

二人が、今後の事についてどうするか話して合ってるのを未来と創世が、見ていると、未来達が来た方とは反対側から同じ姿をした異形が何体も現れた。

ドゴルド「コイツらは!?ゾーリ魔!?デーボス軍はいないんじゃないのか!」

アイガロン「ゾーリ魔どころか、カンブリ魔までいるよ!!どくなってるんよ!?しかもあの様子俺様達を敵だと認識してるよ」

ゾーリ魔「ヌルヌル!!ヌルヌル!!」

ゾーリ魔達は、手に持った特殊な武器を構えて攻撃を開始した

ドゴルド「チツ!!お前ら2人は、下がってろ!!」

ドゴルドは、そう言うのと、アイガロンと共に武器を手に敵の方へ走り出し戦闘を開始した。

2人の強さは圧倒的だったが、例えどんなに強かろうと相手の数は、20倍以上ドゴルドと、アイガロンの顔にも疲労が見えてきた。

ドゴルド「クソツ!!数が多すぎるんだよ!!腹立たしい!!」

アイガロン「さつきから敵が減った感じがしないとか沁みるわあ〜」

その様子を見ていることしかできない創世と未来は、自分達に何かできないか必死で頭を働かせているが、殆どが2人の足を引つ張る形になるものばかりでどうしようもない状況だった。

未来（お願い!!誰か!!今だけでも良い!!2人を助けられる力を!!もう!!あんな思いは、したくない!!）

今未来の脳裏に浮かんでいる記憶は、2年前のあの日の記憶。自分があの日響とライブに行けたら、響はあんな大怪我をしなかったかも知れないと言う後悔。それ以降のイジメから響を助けられなかった悔しさ。あの日末翔が響を助けなかったらどうなっていたか分からない恐怖。そして、今も祈ることしかできない無力感に襲われていた。しかし、それでも彼女の中には、そんな思いも凌駕する強い光があった。それは、響の存在である。響にとって未来が日溜まりであるように、未来にとつても響はかけがえの無い存在であった。それ故に、未来は、彼女の居場所を守りたいと言う強く願った。そしてその強き思いが、原初の強き竜を目覚めさせた!!

そいつは、少女の祈りに答え少女と共に敵を討つために。

ドゴルド「トバスピノだど!?なぜ突然現れた!?!」

ドゴルドは、トバスピノを見上げるそして同時に、トバスピノが、驚いて硬直した未

来をじっと見つめている事に気がついた。

ドゴルド「まさか!?!小日向!!これを受け取れ!!」

ドゴルドは、確証は無かったが目覚めた時に拾ったトバスピノの獣電池と、覚醒していないガブリボルバーを未来に投げ渡した。

それを驚きながらも咄嗟に未来が手に取ると、ガブリボルバーに変化が起きた。

その化石を彷彿とさせる見た目は、光に包まれ光がやんだ時には、その姿を変えていた。その見た目は確かにガブリボルバーであった。しかし、そのガブリボルバーの色は、白をベースに赤と青の模様が入った物で、ドゴルドとアイガロンでさえ全く見たことがない色のガブリボルバーであった。

未来「これは!?!」

未来は、驚いた。手に取った銃らしき物の色が変わったことにも驚いたのだが、それと同時にこの銃の使い方な等が、頭に流れ込んできたのだ。

未来「あなたが教えてくれたの?」

未来は、トバスピノに向かって聞くと、トバスピノはゆっくりと頷いた。そして、何かを伝えようとしているのか、未来の目をしっかりと見つめた。未来は、伝えたいことを理解したのか、しっかりと頷きトバスピノの横に立ち敵の方を向く。

創世「ヒナ!?!」

創世は、突如トバスピノの横に立ち敵の方を向いた未来の行動に驚き声をかける。
未来「大丈夫!!」

未来は、迷いなくそう答えると、獣電池を目の前に掲げ、「ブレイブイン!!」の掛け声と共に獣電池のスイッチを押し込む。すると、トバスピノのシルエツトしか写っていなかった獣電池内の絵柄が変化し、すっかりトバスピノの描かれた絵柄へと変わった。

そして、銃の後ろ側にあるレバーを下ろし銃口側の口を開け獣電池を、装填し口を元の状態に戻した。

『ガブガブリンチョ!!トバスピーノ!!』

ガブガブリボルバーが、獣電池を認識すると、次は「キョウリユウチェンジ!!」の掛け声と共にシリンドラーを回転させた。

すると、銃からその場の状況には全く似合わない愉快なサンバの音が響き渡り、未来はそのリズムにのって、ガブガブリボルバーを片手に踊り出した。

創世「ヒナ!?今踊ってる場合じゃないよ!!!」

未来「体が勝手に動くの!!」

創世「ええ!!?」

創世が驚いている間に体が勝手に動いている未来は、「ファイヤ!!」の掛け声と共に銃口を夜空に向けたガブガブリボルバーの引き金を引いた。すると、銃口から放たれたト

バスピノの顔の形をしたエネルギーは、未来の体の周りを一周した後に、後ろから飲み込むように未来を包んだ。そして、次の瞬間には未来は、紺色のスーツとキョウリユウの顔のようなヘルメットに身を包んだ姿へと変化していた。

創世「えええ!? 踊って変身!? アニメじゃ無いんだよ!」

創世は、思わず詩織の口癖でツツコンだ。

未来は、自分の今の姿に驚きながらも、ゾーリ魔達をと戦い始めた。ガブガブリボルバーと剣のガブガブリカリバーを合体させ、ガブガブルキャノンにして、姿が小さくなったトバスピノと共に敵を圧倒していった。

ドゴルド「初めて戦ったとは思えないほど強いな」

アイガロン「俺様未来から愛に近い感情を感じるんだけど、多分それが彼女の戦う力なんじゃないか? 誰かの為に強くなれるとか沁みるわあ」

未来がキョウリユウジャーに覚醒したおかげで、ゾーリ魔とカンブリ魔達を倒した後ドゴルドとアイガロンは、取り敢えず今いるリディアン校内の森林で生活することになり、未来と創世は今日あったことは皆には秘密にしておこうと言うことになり、未来は、トバスピノの小さい状態、ミニスピノと共に自分の部屋に帰り創世も自分の部屋に帰った。

リディアンの屋上そこに1人未来達の戦闘を見ていた者がいた。

???「はー……ノイズやシンフォギア何て言う存在だけでも面倒なのに新しいキョウリュウジャーに、そのキョウリュウジャーの味方になったドゴルドとアイガロ……ふう、頭が痛てえ……まあ、まだ戦力も揃ってない。しかも、今回で戦力の多くを失った。まだ奴等が目覚めるのは先だ……後1年か、2年は、大人しくしておくか……」

その者は眩き終わると共に闇の中へと姿を消し、屋上再び静寂に包まれた。

場所は変わり、海辺

そこには、1人の男がいた。その姿はを見るに僧侶だと思われる男は、浜辺に沿ってゆつくりと歩いていた。

そんな彼を月光は祝福するかのように照らし、左手薬指の赤き宝玉と獅子の顔持つリングはその光を反射し、神秘的であった。

つづく

目覚めと現状

真つ暗闇の中未翔は、ただ一人立っていた。どこまでも続く暗闇しかしそこに突然光が現れた。

その正体は、自分の思い出が映像として、流れているものだった。転生前の出来事や転生後の出来事色々な思い出が次々と流れている中、ある映像が映ったとき未翔は、それを掴み取った。

その映像には、未翔が仮面ライダーの姿で白い髪の少女の頭を撫でている映像だった。

未翔「今度は、絶対に約束をはたさねーとな。」

その言葉と共に、暗闇は剥がれ落ち全てが光に包まれ、未翔は、目を覚ました。

未翔 side

俺が目を覚ました後に弦十郎さんが、俺が寝ている間のことを教えてくれた。

まず、俺は1週間ほど眠ったままだったそうだ。原因は、トラウマなどによるストレスで、精神への多大な負荷がかかったことが原因らしい。

何が原因かは、確実にあの時なのは確かだろう。

次に、俺が眠っている間にあった出来事を聞いた。

まず俺が倒れたすぐ後に翼さんが、絶唱を歌い死にはしなかったが、重傷で今も入院中らしい。そして響は、弦十郎さんに修行をつけてもらい実力向上。その後更に、偶然出会った僧侶に修行をつけてもらったらしい俺は、その修行の内容を聞いて（ジープで突進されたり滝の水を切れと言われたり）その人物が、何者か察した。

更に、スピードワゴンが連れてきた3人の人物から今現在修行を受けている最中だそう。

そして、ネフシユタンの少女は二課の本部の更に下に保管されていた完全聖遺物デユランダルの輸送時に再び現れたらしい。

他にも、有力な情報をいくつか弦十郎さんから教えてもらった。

この時の俺は、一通りの事を教えてもらった後に、ジャンヌに説教されるとは、まだ考えが回らなかった。

未翔 side out

未翔がジャンヌに説教されているころ時を同じくして響は、難関に差し掛かっていた。

??? 「リサリサ先生!!このままでは、彼女が真つ二つになってしまいます!!」

リサリサ 「彼女ならきつと大丈夫です。」

??? 「それに彼女の顔を見てみるんだ。彼女は、まだ諦めていない。」

??? 「しかし!!はっ!!彼女が動き出した!!」

響が今立ち向かっている試練それは、過去にジョセフ・ジョースター経験した試練。

そして、それはリサリサの元で、ジョセフが最初に課せられた試練でもあった。

とめどなく油が流れ出す高さ24 m最大円周7 m 20 cmの大理石の円柱を己の肉体と波紋のみで登りきらなければならない試練。

その名は!!

『地獄昇柱（ヘルクライム・ピラー）』

つづく